

新型コロナウイルス感染症の 県内発生について その15

～第六波の現状～

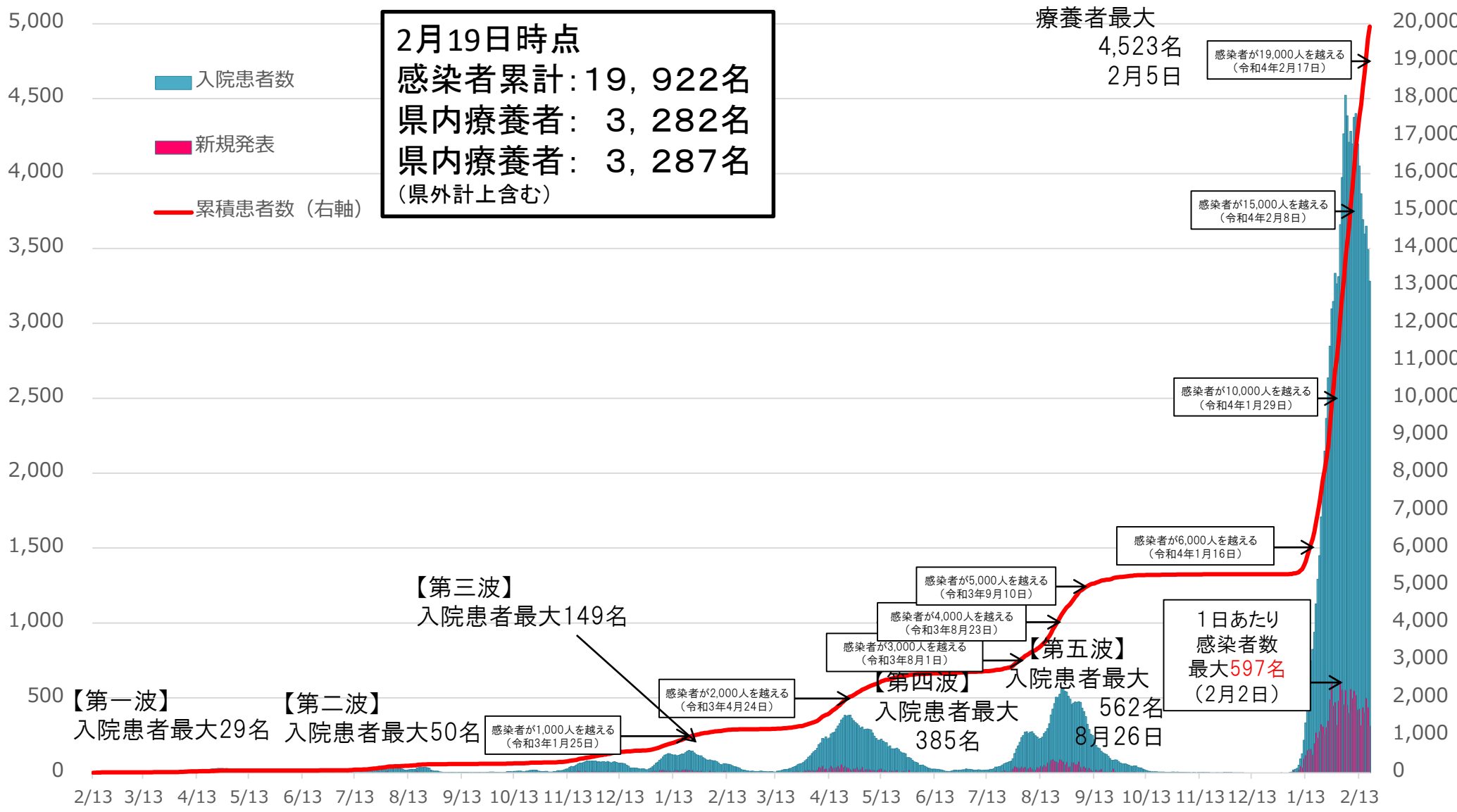
和歌山県福祉保健部技監 野尻 孝子

2022年2月24日

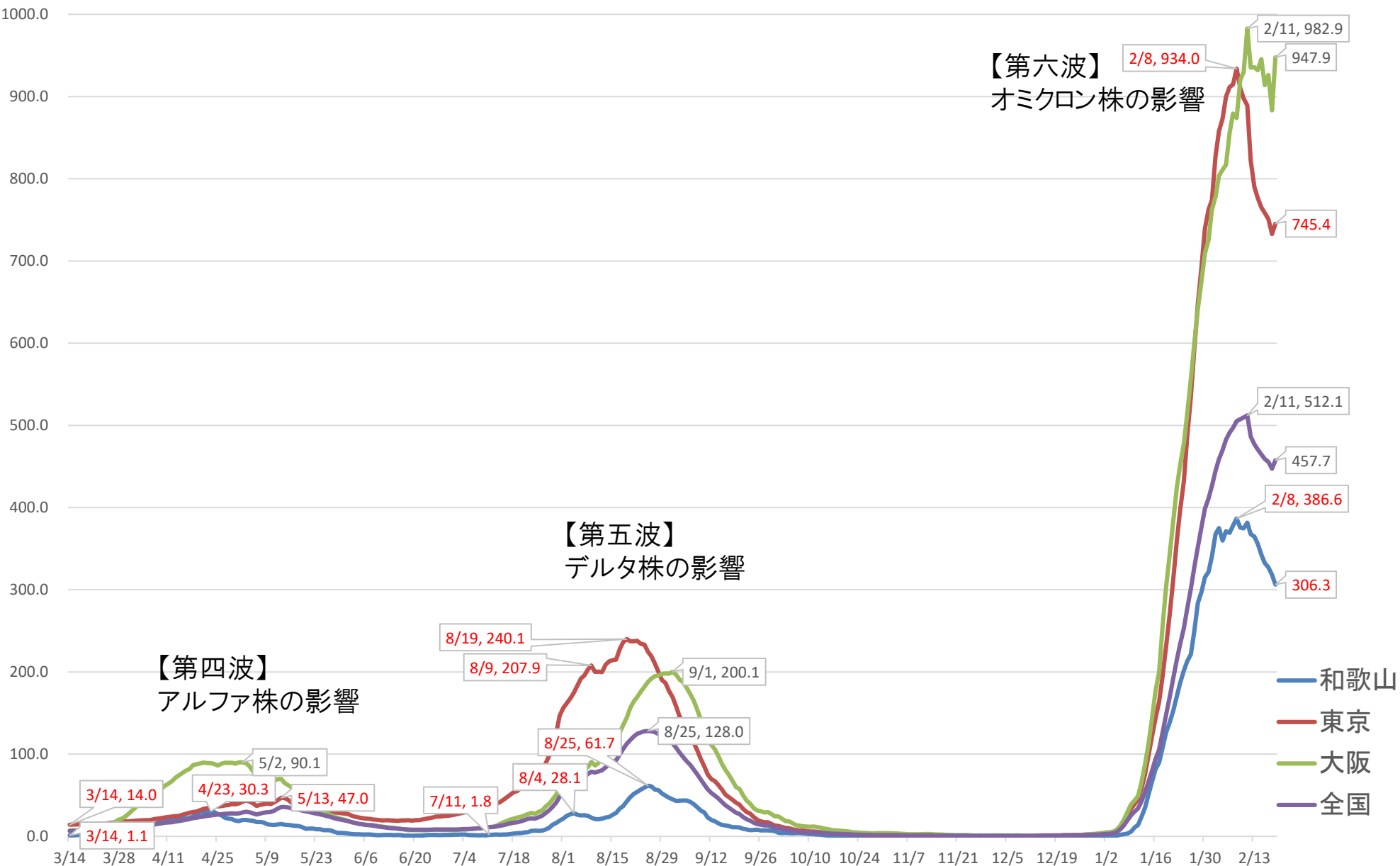


和歌山県内の新型コロナウイルス感染症 感染動向の推移

令和4年2月19日
発表分まで



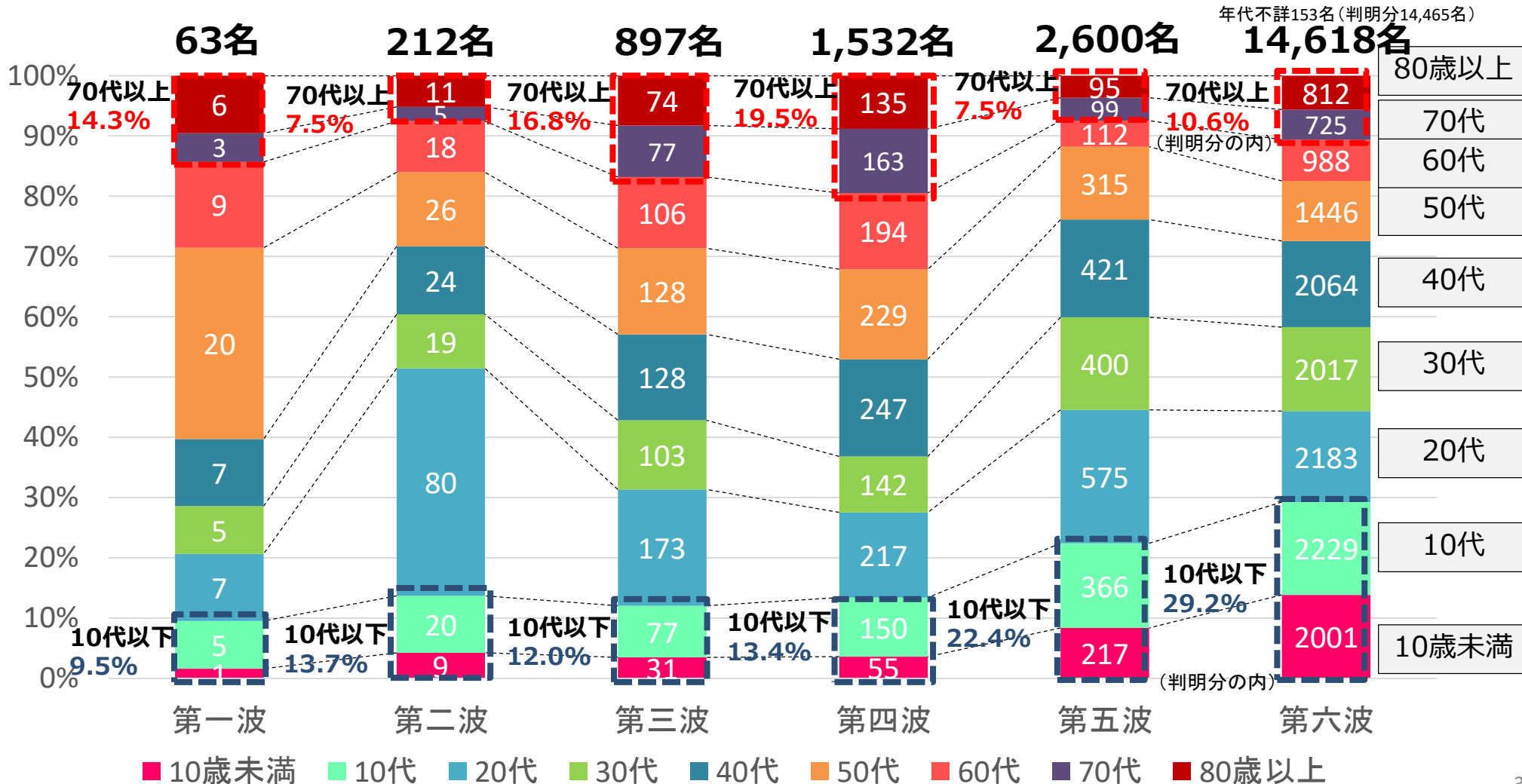
感染動向の推移（全国・東京・大阪・和歌山） 1週間・人口10万人当たり 令和4年2月19日現在



県内の年齢別感染者数

(令和4年2月19日発表分まで)
19,922名

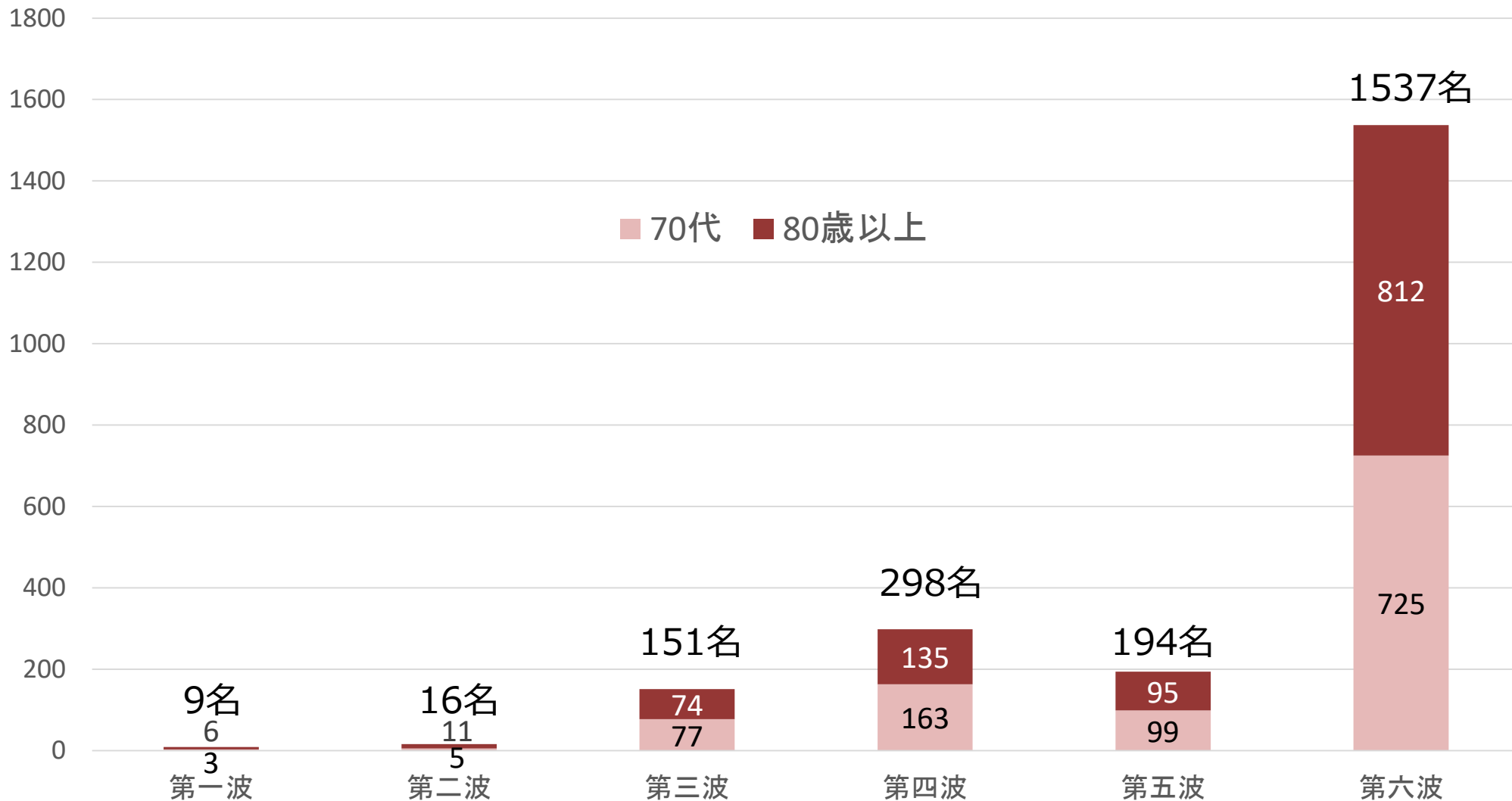
- 第一波では感染者の年代は50・60代が中心であったが、第二波では、20代以下の若者が中心となった。
- 第三波では、全年齢に感染が広がったが、特に高齢者と小児の患者数が増加している。
- 第四波においても、各年代に感染が広がるとともに、高齢者の割合が高くなっている。
- 第五波においては、20代が最も多く、高齢者は少ない。10代以下の若年者・小児が増加した。
- 第六波においては、10代以下の若者・小児が急増するとともに高齢者が増加した。



70歳以上の感染者数の推移

(令和4年2月19日発表分まで)

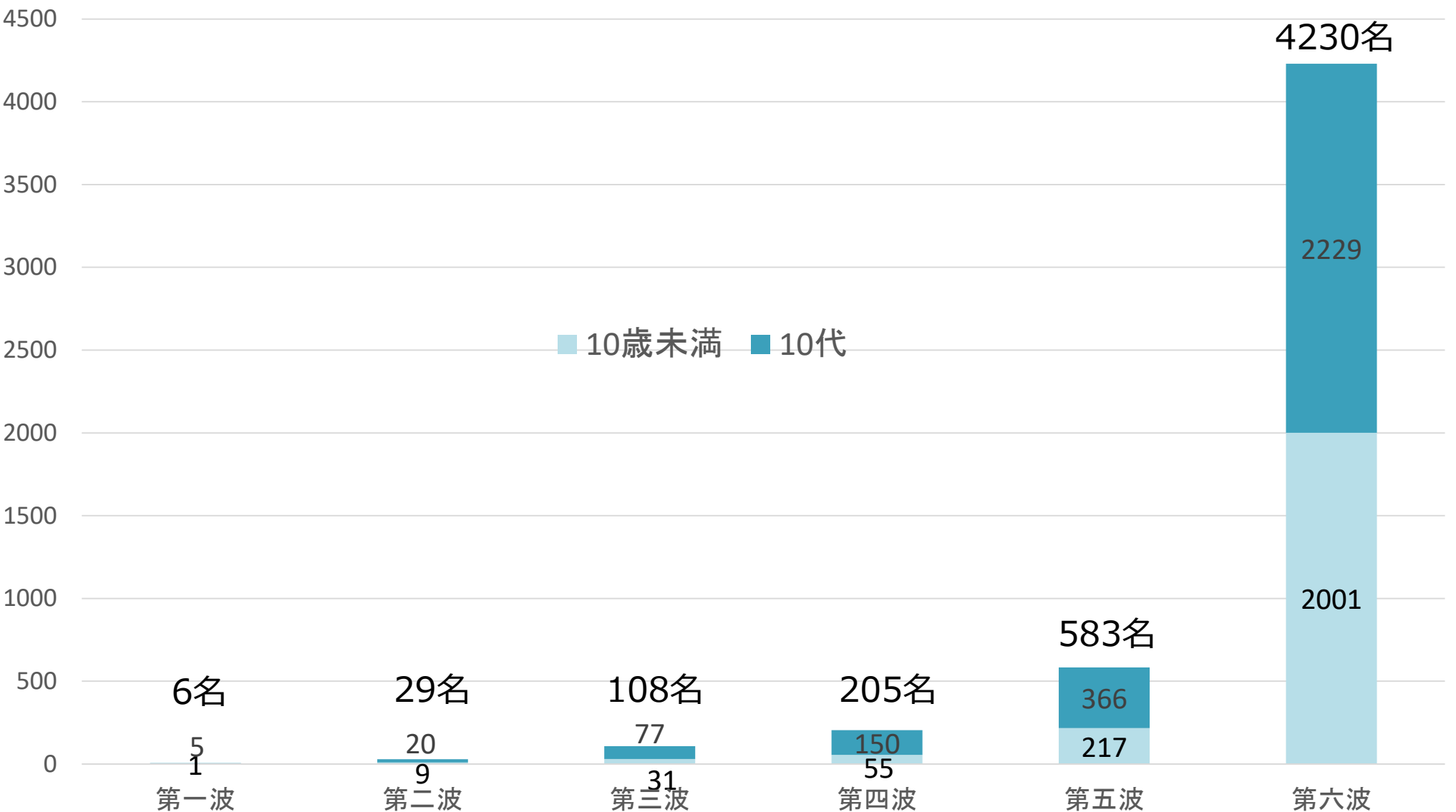
- 第三波・第四波では、高齢者が増加したが、ワクチン接種の効果により、第五波では高齢者の感染者は減少した。
- しかし、第六波では、感染者の総数が急増するとともに、70歳以上の高齢者が急増した。



10代以下の感染者数の推移

(令和4年2月19日発表分まで)

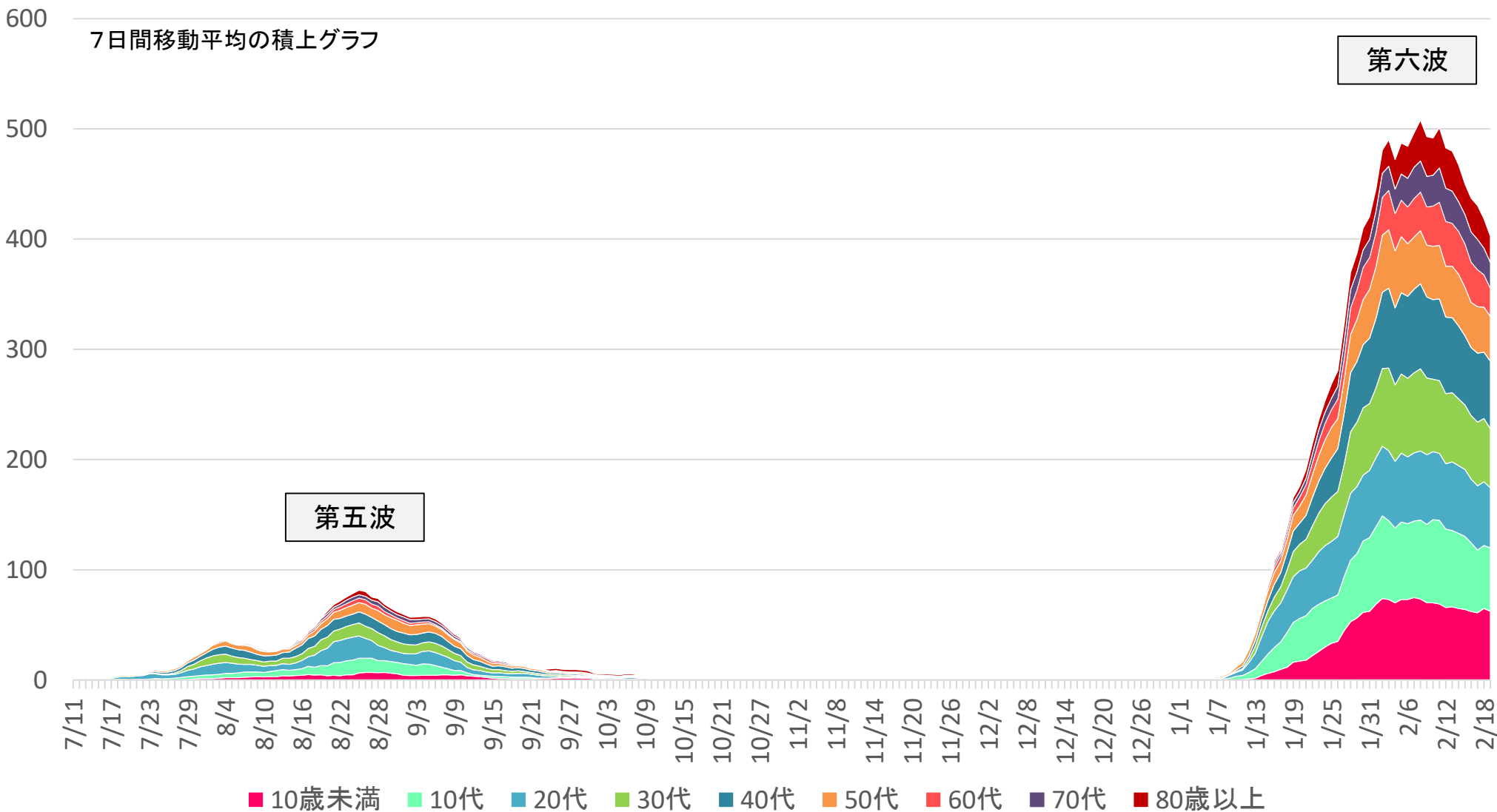
- 感染の波を経るにつれて10代の若者や10歳未満の小児の感染者は増加した。
- 第六波では、感染者の総数が急増するとともに、ワクチン未接種が多い10代以下の小児が急増した。



県内の第五波以降の年齢別感染者数

(2月19日発表分まで)
第五波～ 17, 218名
年代不明分を除く

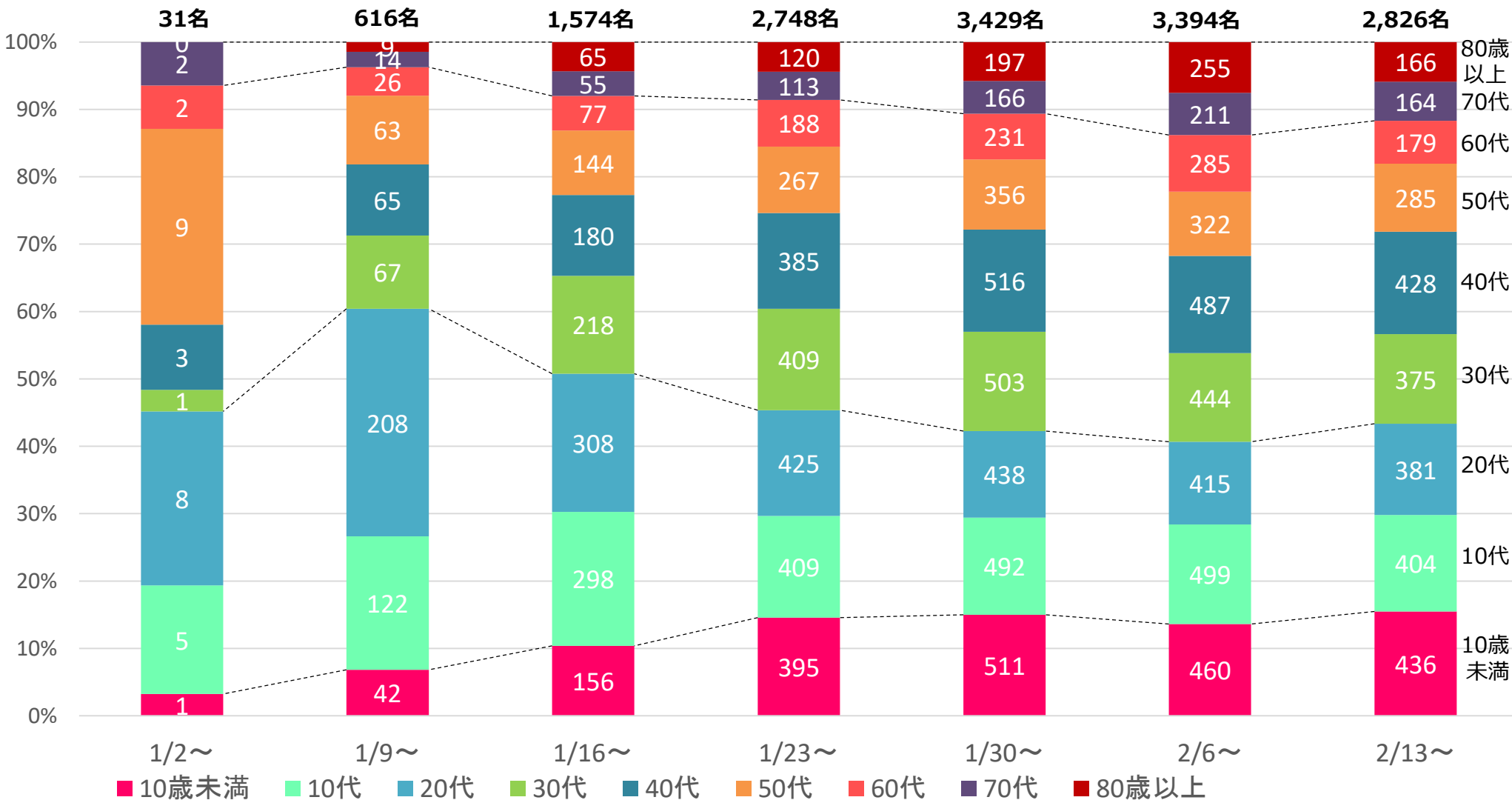
- 感染の波を経るにつれて10代の若者や10歳未満の小児の感染者は増加した。
- 第六波では、感染者の総数が急増するとともに、ワクチン未接種が多い10代以下の若者・小児が急増した。



県内の第六波以降の週別年齢別感染者数

(2月19日発表分まで)
第六波～ 14,618名

- 第六波のこれまでのピークは、1月末から2月の第一週で、小児の感染が増えたことが最大の原因と思われる。
- 第六波で高齢者が最も多かったのは、2月の第二週で高齢者施設関係のクラスターや家族内感染が増えたことによると思われる。

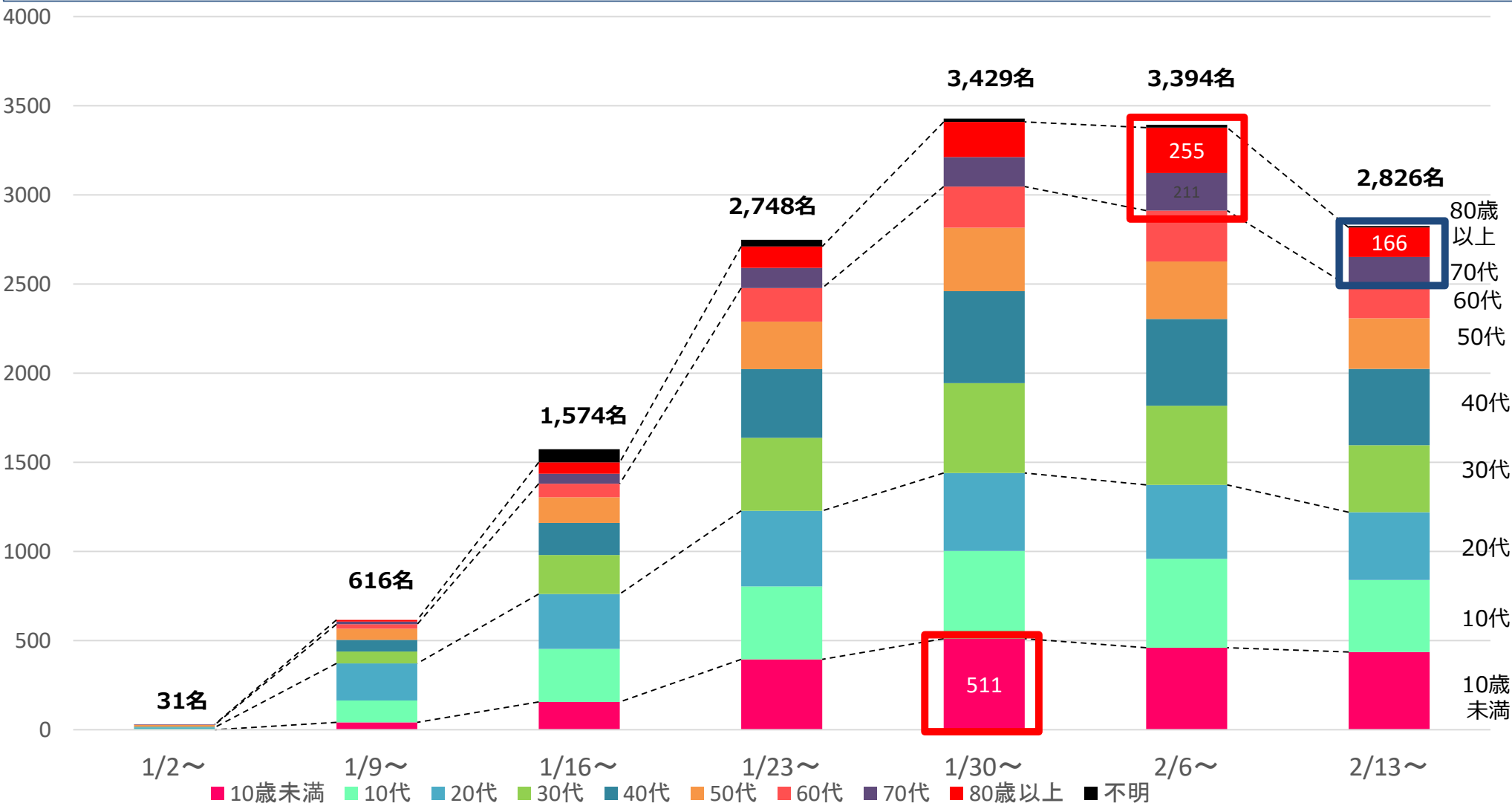


※グラフは年代不詳分を除いているため、各年代の合計値と各週の人数(上部の数)が一致しない場合がある。

県内の第六波以降の週別年齢別感染者数

(2月19日発表分まで)
第六波～ 14,618名

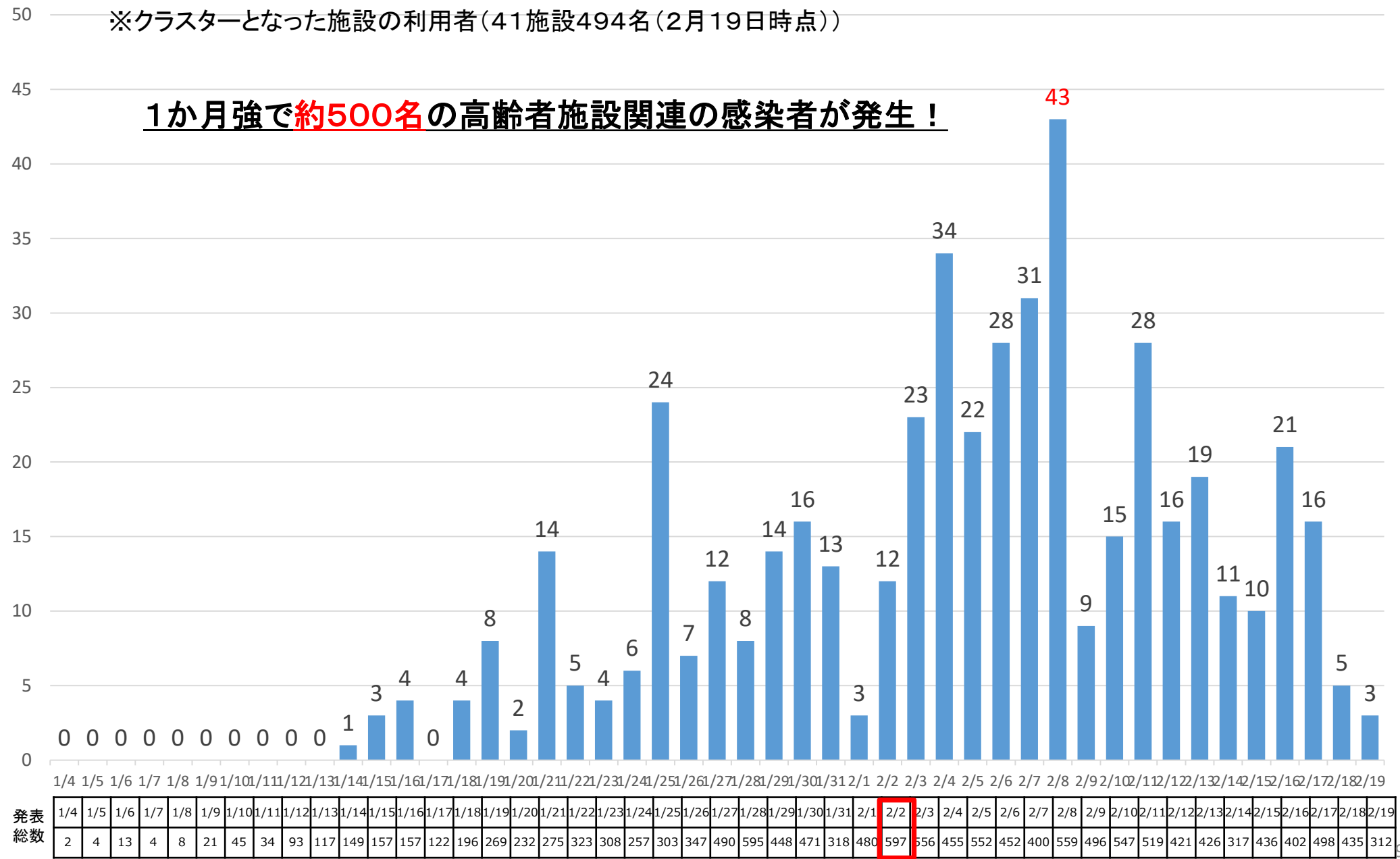
- 第六波のこれまでのピークは、1月末から2月の第一週で、小児の感染が増えたことが最大の原因と思われる。
- 第六波で高齢者が最も多かったのは、2月の第二週で高齢者施設関係のクラスターや家族内感染が増えたことによると思われる。
- 第六波の感染者数は、2月の第三週目から減少しているが、高齢者施設関係のクラスターが減少したことや小児の感染者数が減少したことによると思われる。



高齢者施設利用者の新規感染発表数の推移（第六波）

※クラスターとなった施設の利用者（41施設494名（2月19日時点））

1か月強で約500名の高齢者施設関連の感染者が発生！



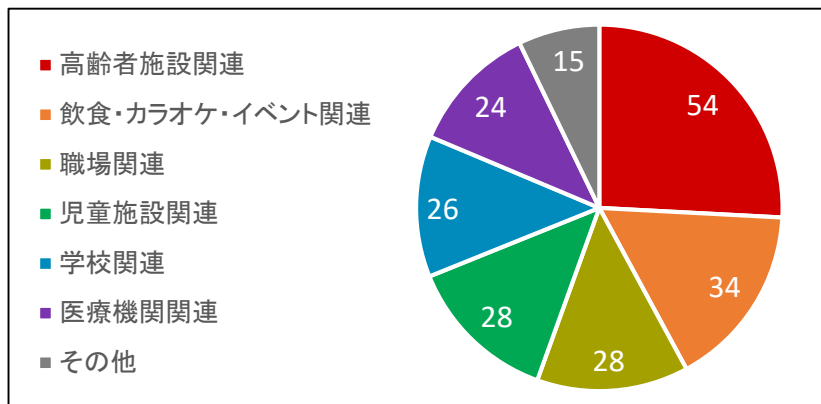
クラスター

クラスター発生数 概要

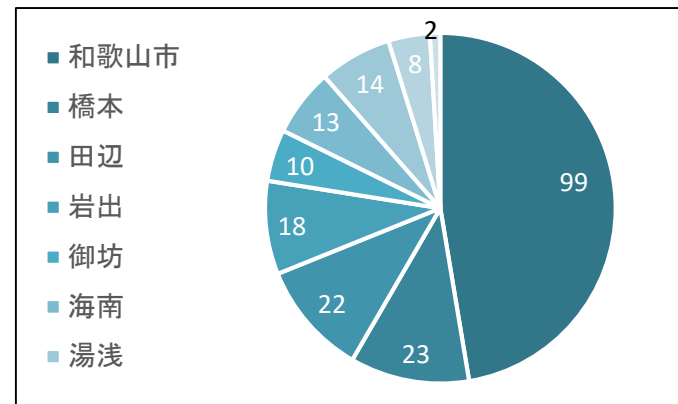
令和4年2月20日時点

- これまでのクラスターで最も多かったのは、高齢者施設関係であった。
- クラスターの発生は、保健所別では、和歌山市が約47%を占めているが、次いで橋本、田辺、岩出保健所が多い。
- 発生月では、第六波の2月が最も多くなっている。

1. 種類別発生数

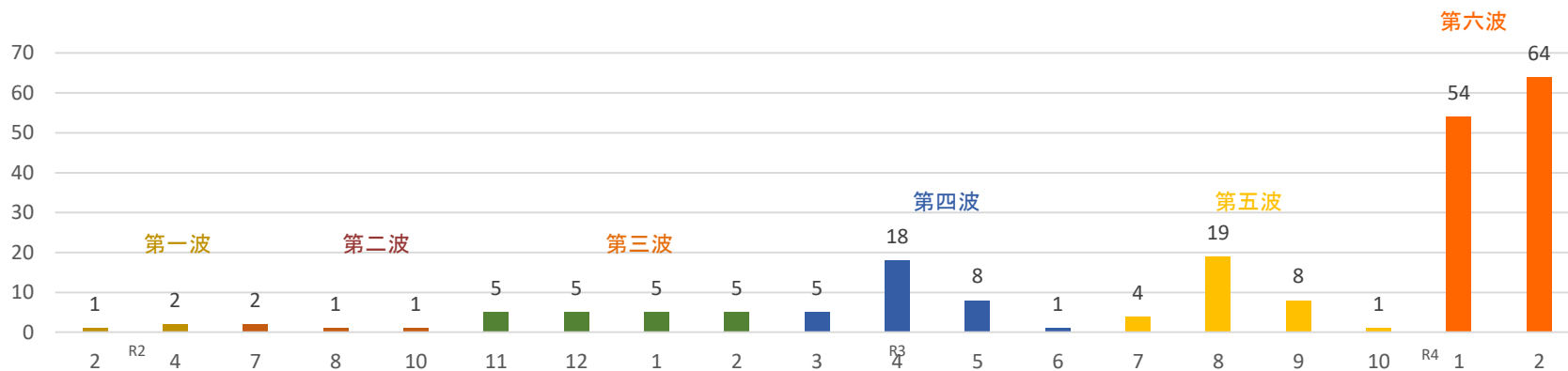


2. 保健所別発生数



3. 月別発生数

※横列: 月、縦列: 発生件数

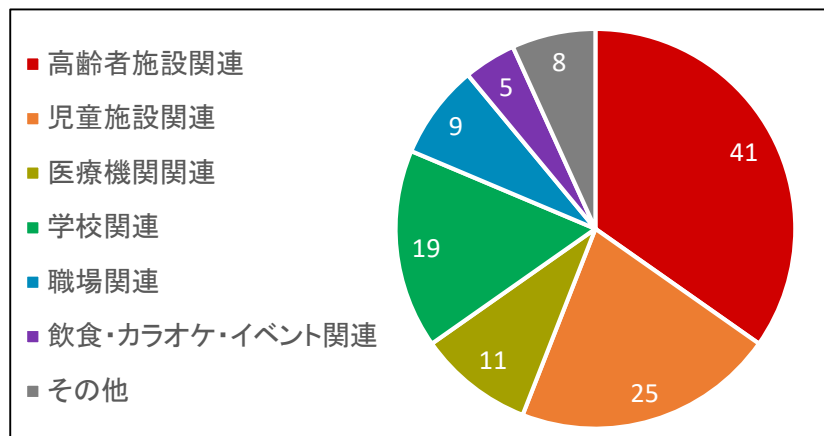


クラスター発生数 第六波

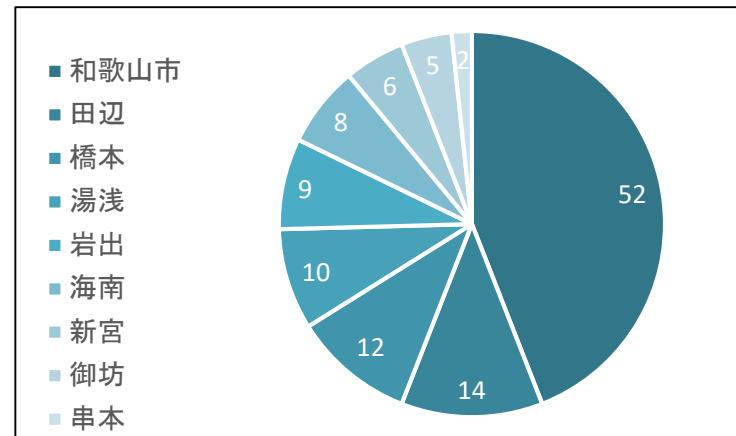
令和4年2月20日時点

- 第六波のクラスターで最も多かったのは、高齢者施設関係であり、次いで児童福祉施設、学校となっている。
- 保健所別では、和歌山市が約44%を占めているが、次いで田辺、橋本、湯浅保健所が多くなっている。
- 発生規模別では、高齢者施設関連や医療機関では、密接、密閉空間になりやすいことから規模が大きくなる傾向にあった。また、児童、学校では、臨時休業によって比較的規模が小さい傾向にあった。

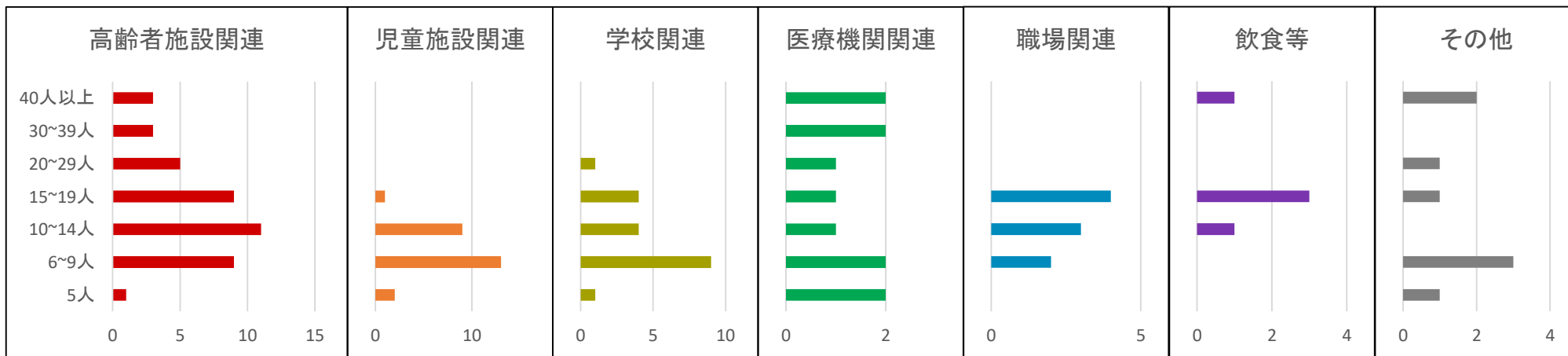
1. 種類別発生数



2. 保健所別発生数



3. 種類別規模

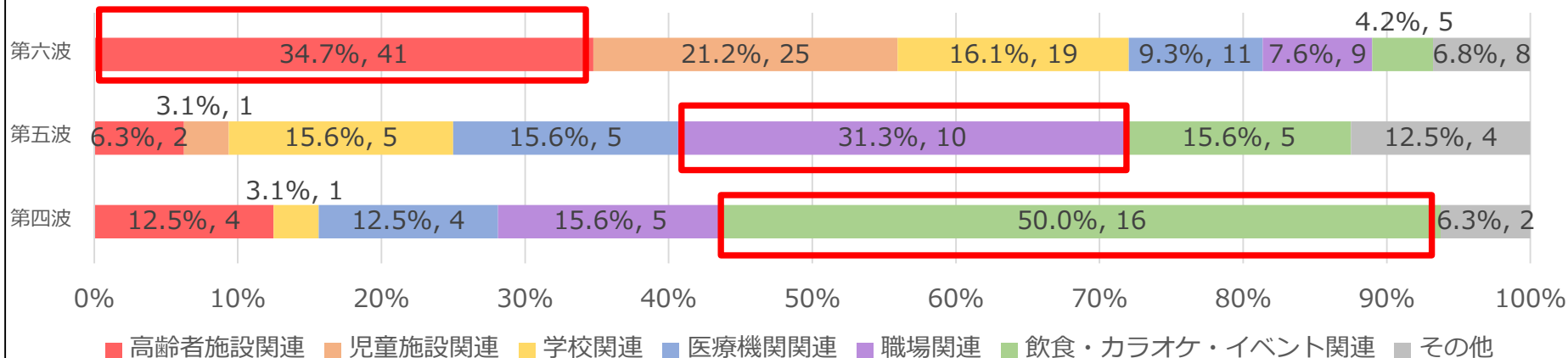


クラスター発生数 第四波～第六波

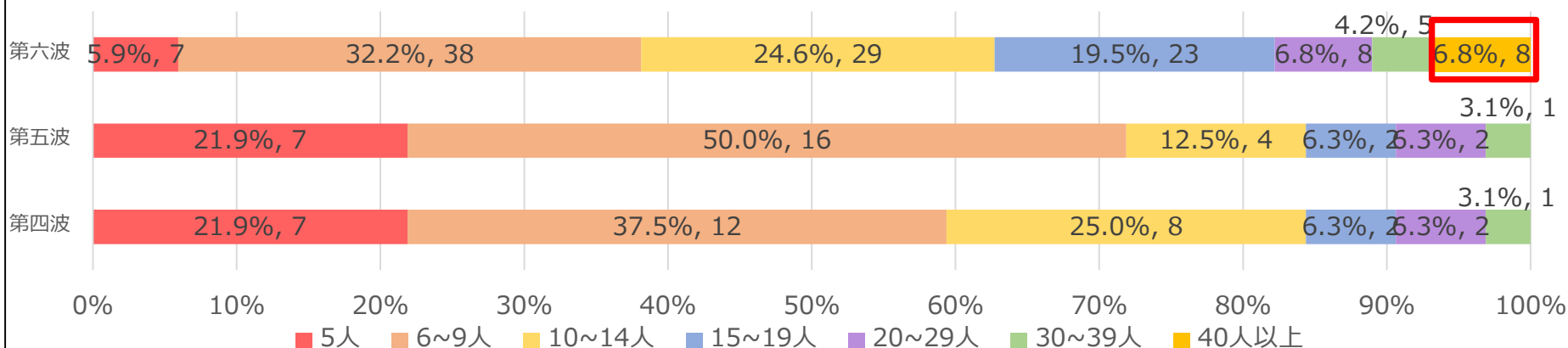
令和4年2月20日時点

- クラスターが最も多かったのは、第四波では、飲食・カラオケ・イベント関係、第五波では、職場関係、第六波では高齢者施設であった。
- 第六波のクラスターは、オミクロン株の感染拡大のスピードの速さによると考えられるが、40人を超える大規模の発生が複数見られた。

クラスター施設



クラスター発生規模



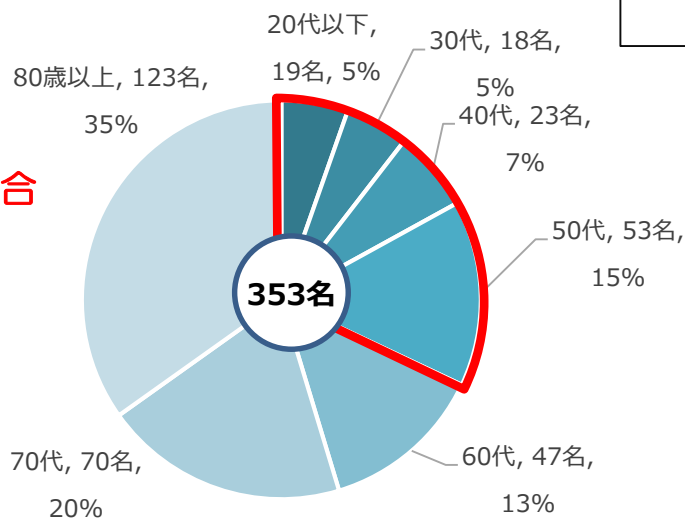
肺炎併発者の分析

第六波における肺炎患者の状況

令和4年2月10日時点
N=353

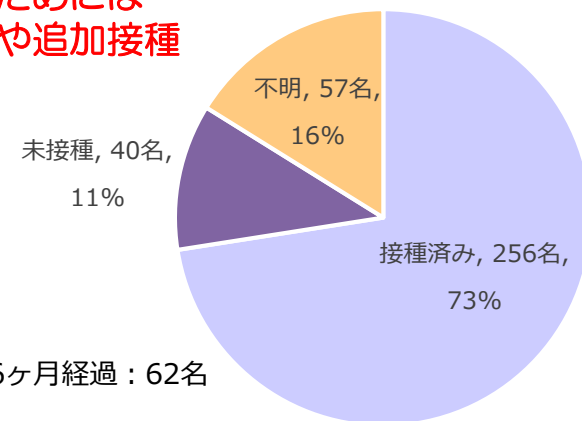
- 第六波の令和4年1月4日から2月10日に入院した感染者のうち肺炎を確認した353名（入院者の約18%）について分析した。
- 肺炎の併発は60代以上の高齢者に多いが、30代以下の若者も約10%いた。最年少は10歳未満であった。
- 肺炎を併発した者のうち約3割が酸素投与が必要になっている。
- 約4割に抗体療法が、半数以上に抗ウイルス薬が投与されていた。

年代別



ワクチン接種

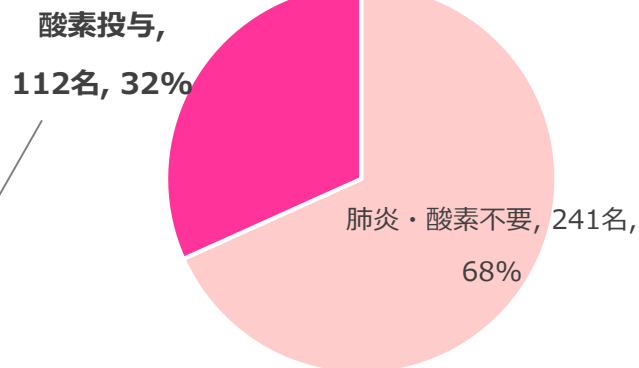
重症化を防ぐためには
ワクチン接種や追加接種
が重要



肺炎の併発は高齢者に多いが、
50代までの若年・壮年層の割合
が約3割を占める

男性	198名
女性	155名

重症度



治療薬

様々な治療薬が使われて
いるが、治療効果を
発揮するためには、
早期受診が必要

抗体薬	150名
抗ウイルス薬	192名
ステロイド薬	78名

※重複投与を含む

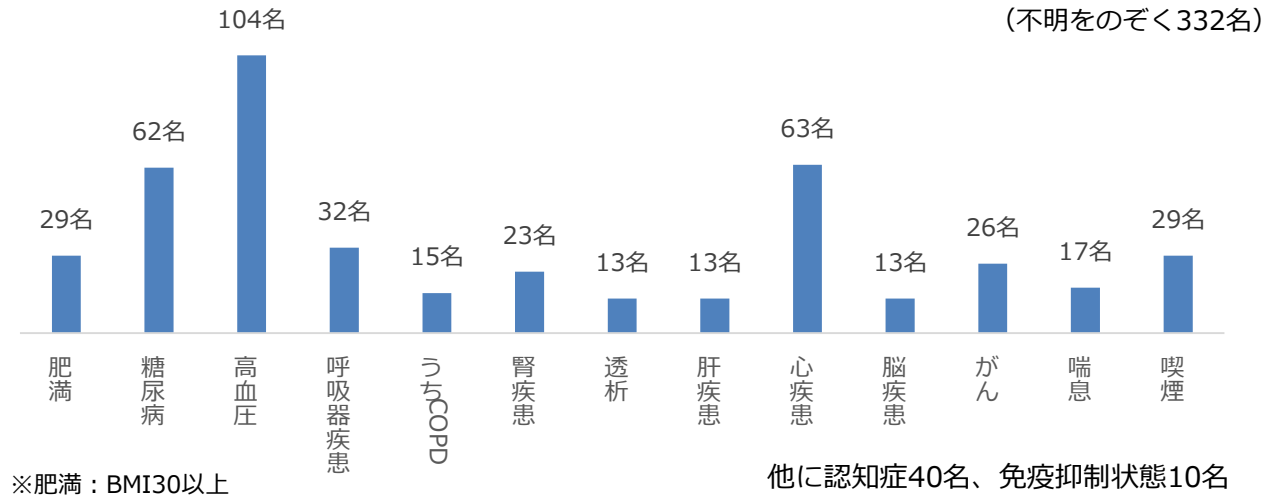
第六波における肺炎患者の状況

令和4年2月10日時点

- 肺炎併発者の基礎疾患は、高血圧、心疾患、糖尿病、呼吸器疾患、肥満、がん、腎疾患が多かった。喫煙も多いことに留意する。
- 発症から検体採取までの日数は、約4割が発症日であったが、19名（約6%）は発症5日以上かかっていた。受診・診断が遅れた者は重症になることが多い。

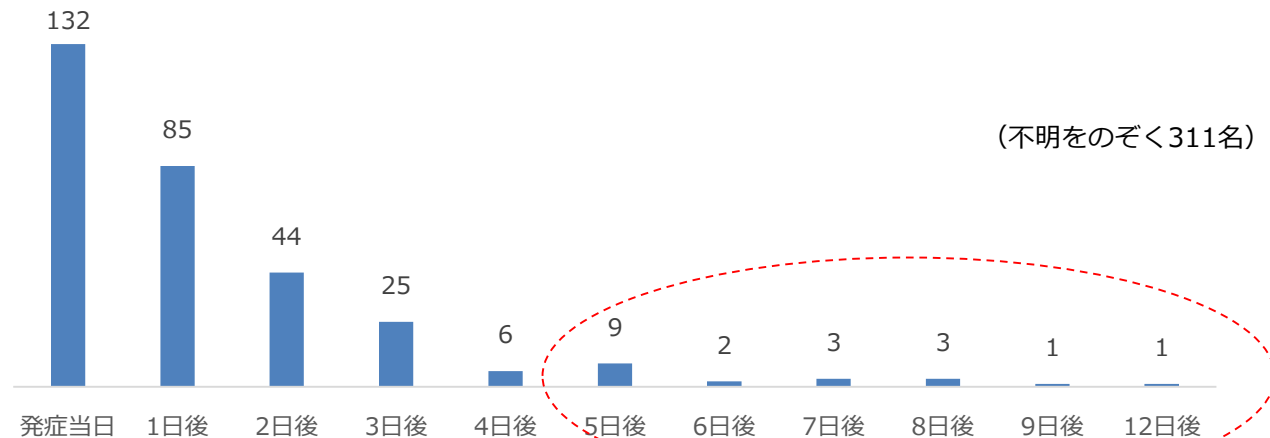
基礎疾患の状況

肥満、糖尿病や高血圧といった生活習慣病はリスクが高い



発症～検体採取までの日数

5日以上かかった19名中
酸素投与が必要となったのは9名
うち人工呼吸器1名、高流量酸素4名



第六波における肺炎患者の状況

令和4年2月10日時点

- 肺炎併発者が、陽性判明時に無症状であった者が約6%いた。年代では、高齢者の方が多かった。これは、クラスター発生により検査に早期につながったことによると思われる。
- 肺炎併発者が、陽性判明時に有症状であった者は、幅広い年代にわたっていたが、特に、高齢者では重症化する者が多い。

当初症状と経過中の症状

(不明をのぞく329名)

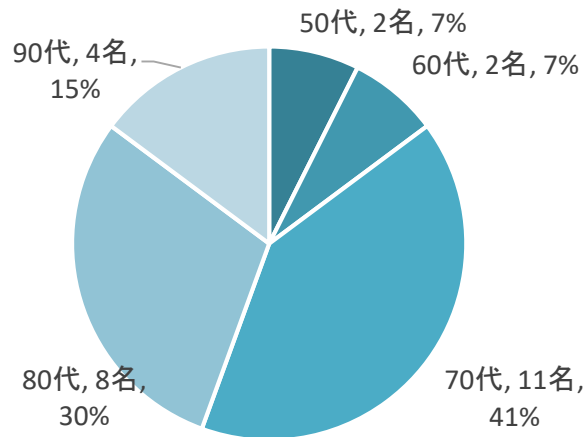
当初症状	経過中の症状	合計	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
無症状	肺炎	19			1	1	3	3	4	7
	酸素投与	5					1		1	3
	うち人工呼吸器・高流量酸素	2							1	1
	うち死亡	0								
有症状	肺炎	310	1	18	15	21	46	40	61	108
	酸素投与	99			1	1	3	12	22	60
	うち人工呼吸器・高流量酸素	19					1	2	8	8
	うち死亡	6							2	4
合計		329	1	18	16	22	49	43	65	115

第六波における国基準相当重症者について

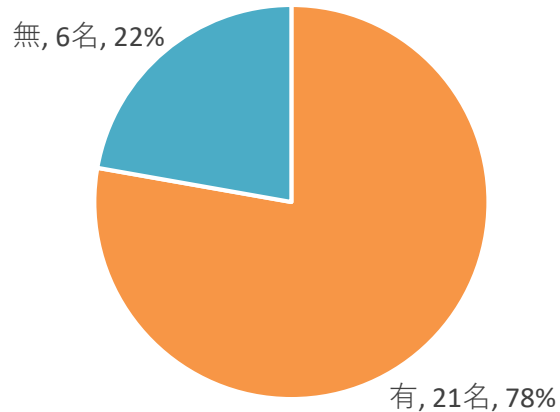
N=27名

- 高流量の酸素投与が必要な肺炎があり、I C U入室に相当したり、人工呼吸器装着をした重症者は、50代以上で特に、70代以上の高齢者に多い。
- 基礎疾患として高血圧、心疾患、腎疾患、糖尿病、がん、呼吸器疾患、透析患者に多い。
- 第六波ではワクチン接種の効果が減弱により2回接種者でも重症化した。陽性判明時無症状でも注意が必要である。

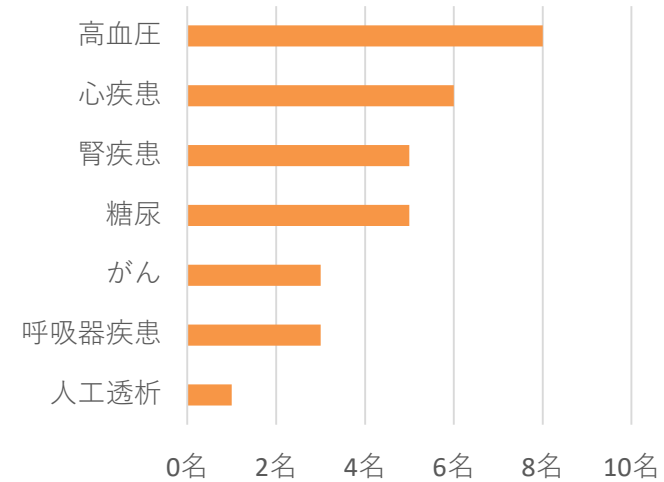
1. 年代



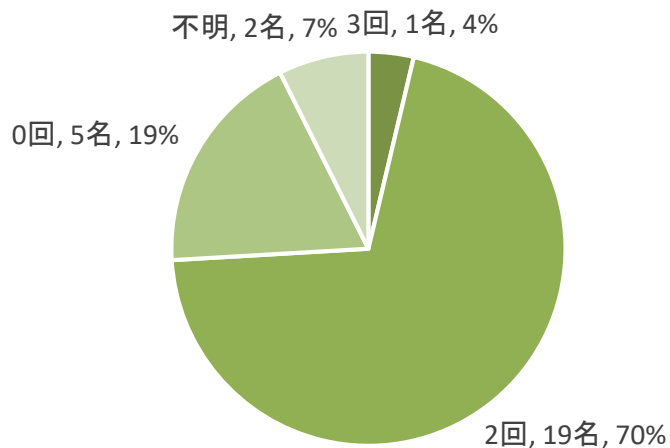
2. 基礎疾患



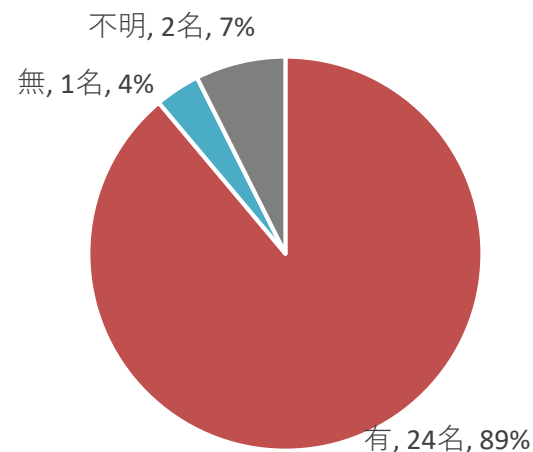
(重複を含む。)



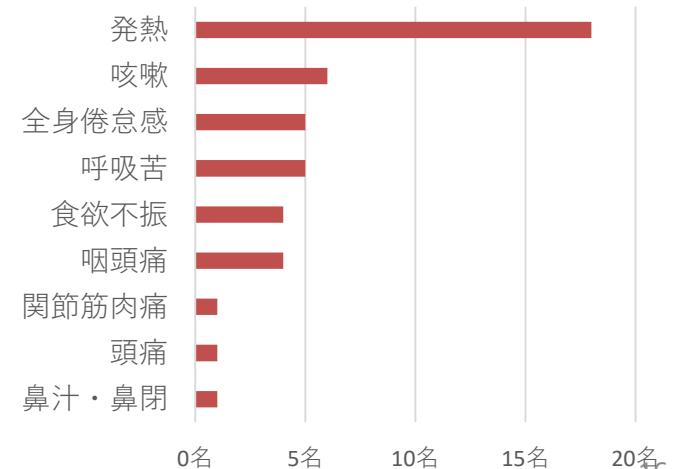
3. ワクチン接種回数



4. 陽性判明時症状



(重複を含む。)



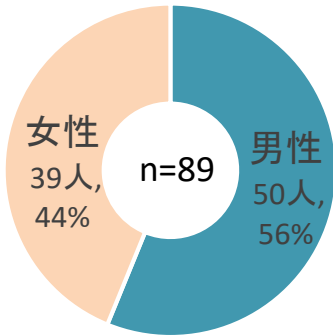
死亡の状況

死亡（間接死因含む）の状況

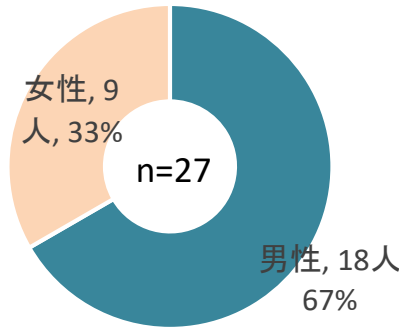
令和4年2月19日発表まで

- これまでの死亡者89名のうち男性の方が多く、70代以上の高齢者は約93%である。
- 第三波、第四波では、高齢者の感染者が増加したことにより、死亡者も増加したが、ワクチン接種による効果と考えられるが、第五波では、死亡者は減少した。
- 第六波では、男性が多く、90代以上の高齢者が多かった。しかし、爆発的な感染拡大が起こったが、死亡者の割合はむしろ減少した。

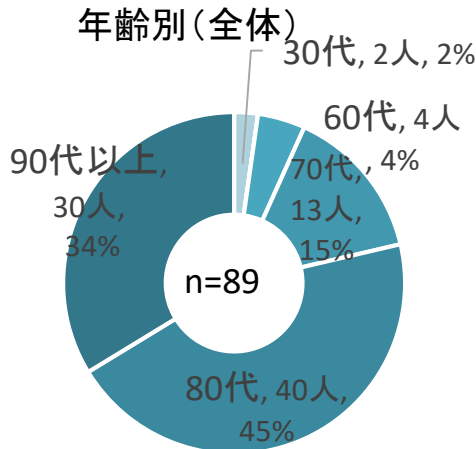
性別(全体)



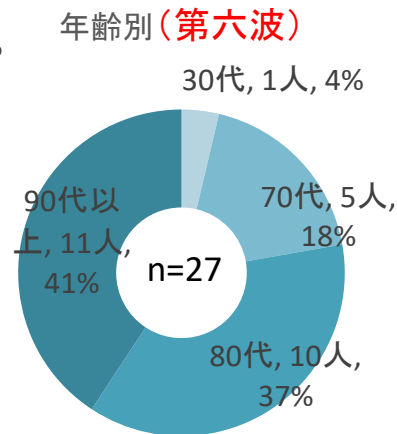
性別(第六波)



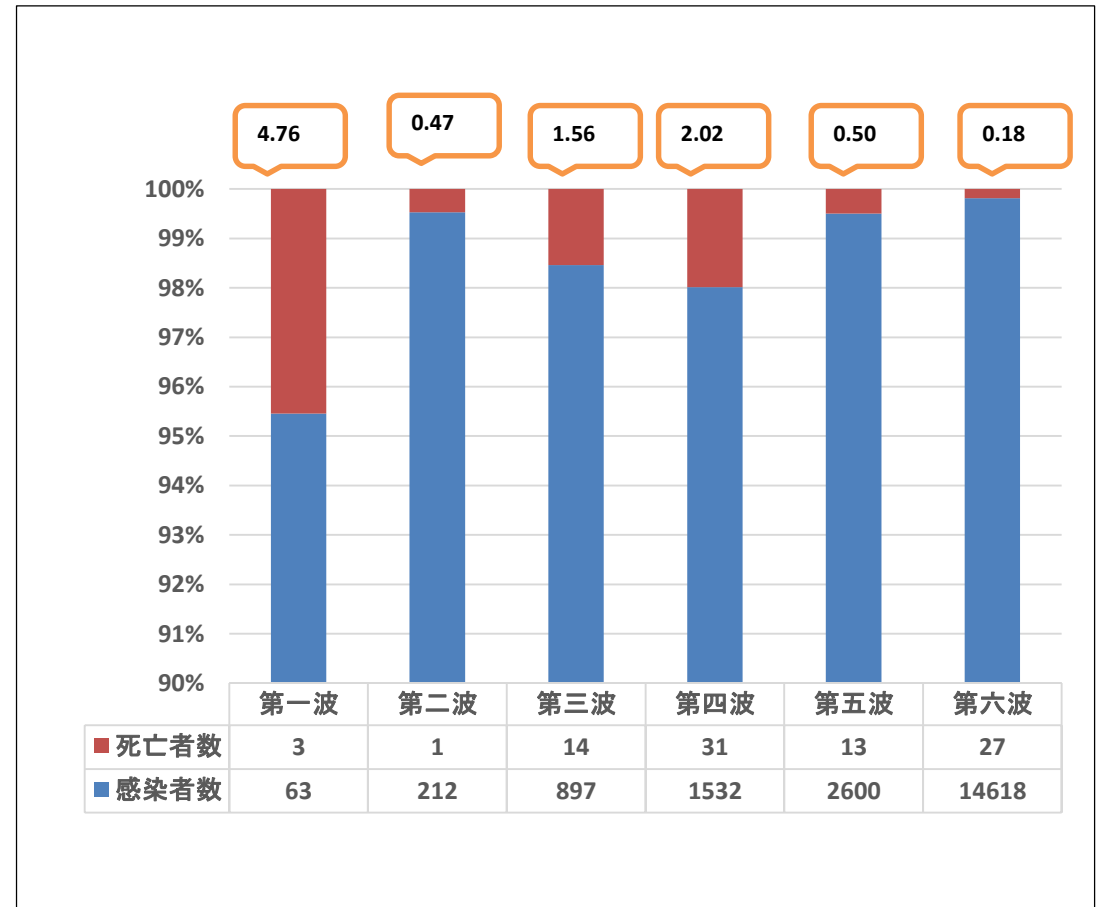
年齢別(全体)



年齢別(第六波)



波別の死亡割合

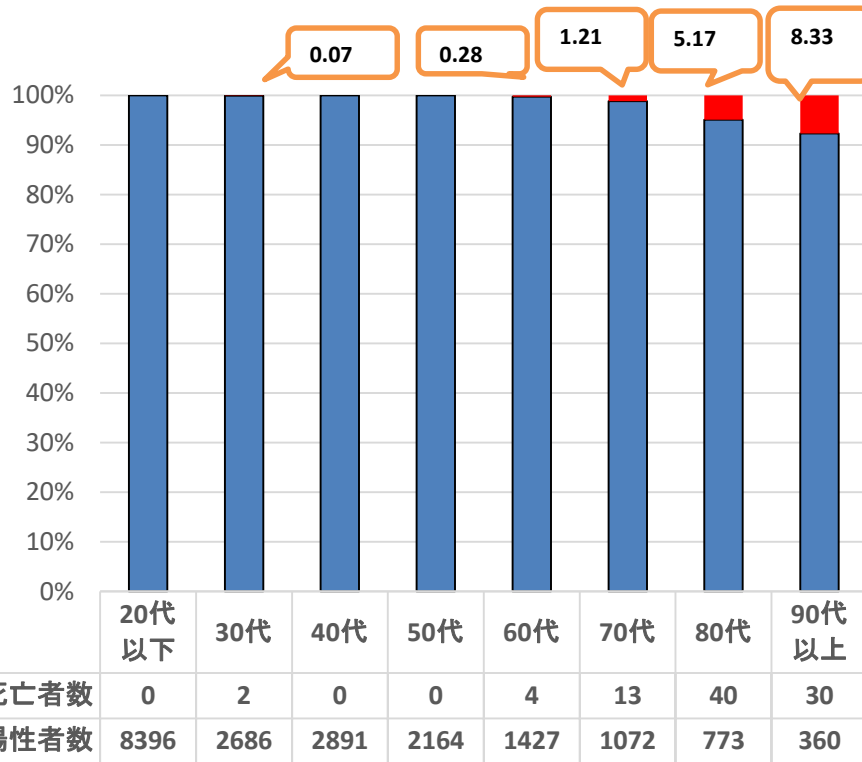


死亡（間接死因含む）の状況

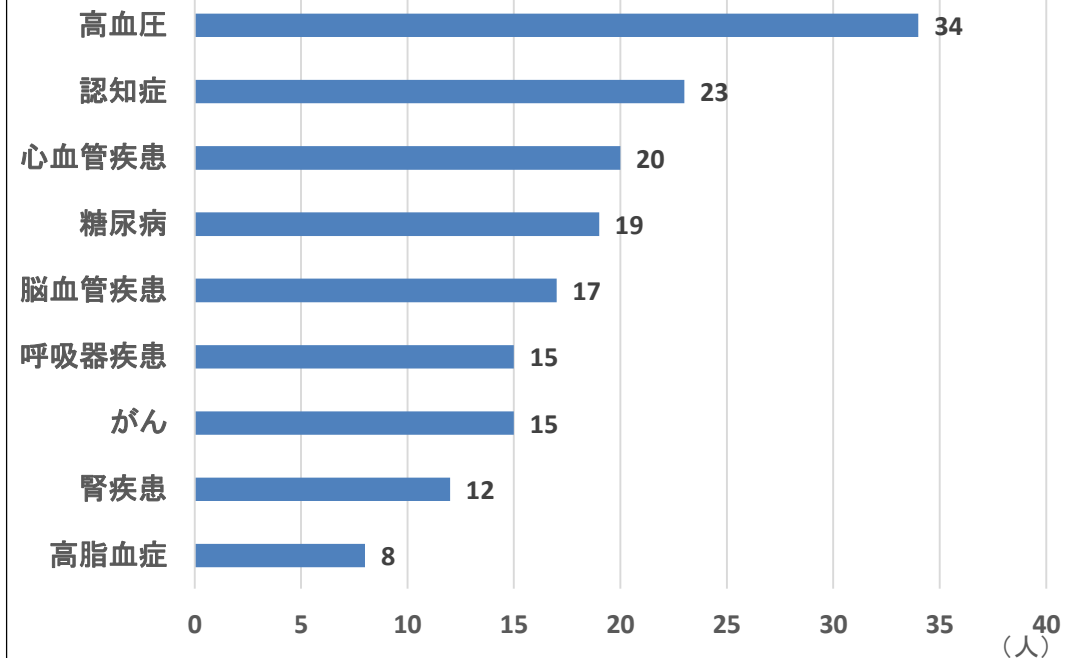
令和4年2月19日発表まで

- これまでの死亡者89名のうちの年代別死亡割合は、60代から増えている。特に、80代以上の高齢者は死亡する割合が高かった。
- 死亡者の主な基礎疾患は、高血圧、心血管系疾患、糖尿病、呼吸器疾患、がん、腎疾患が多かった。高齢者のため、認知症、脳血管疾患も多かった。

年代別の死亡割合



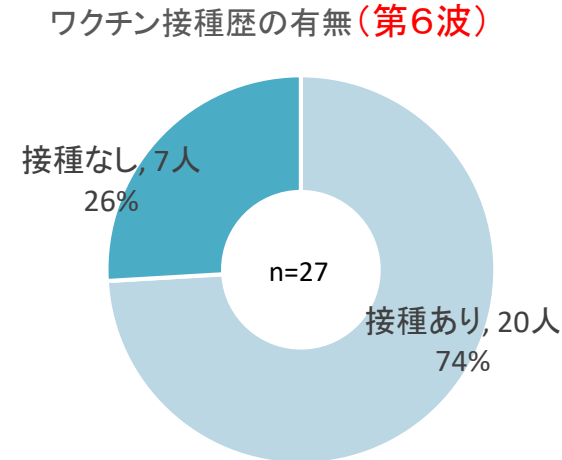
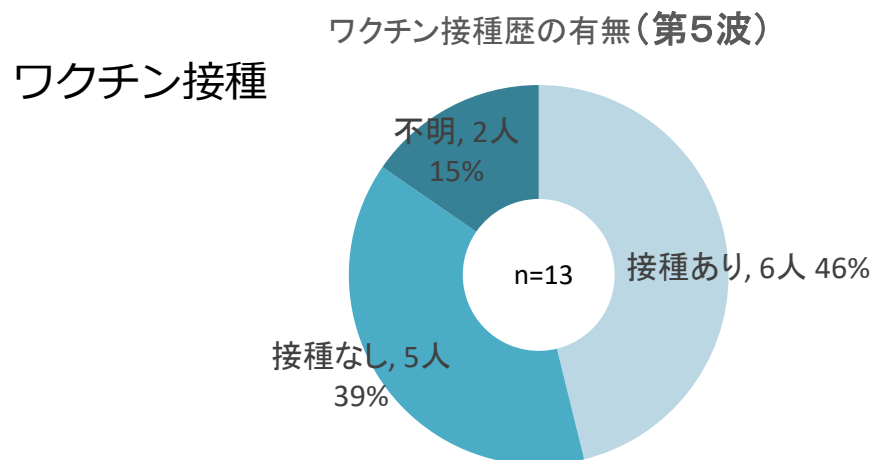
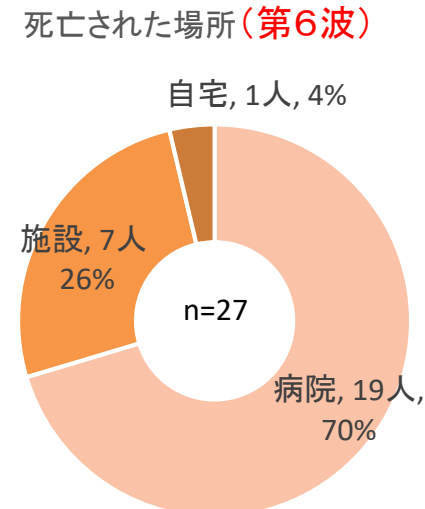
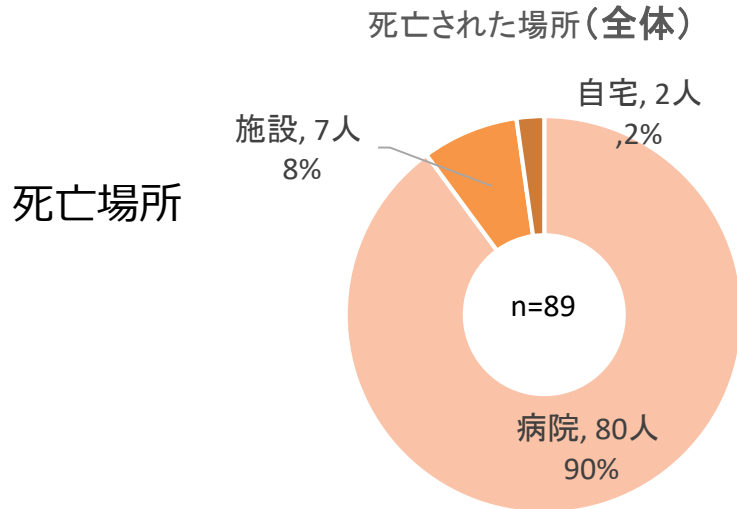
主な基礎疾患（重複あり）



死亡（間接死因含む）の状況

令和4年2月19日発表まで

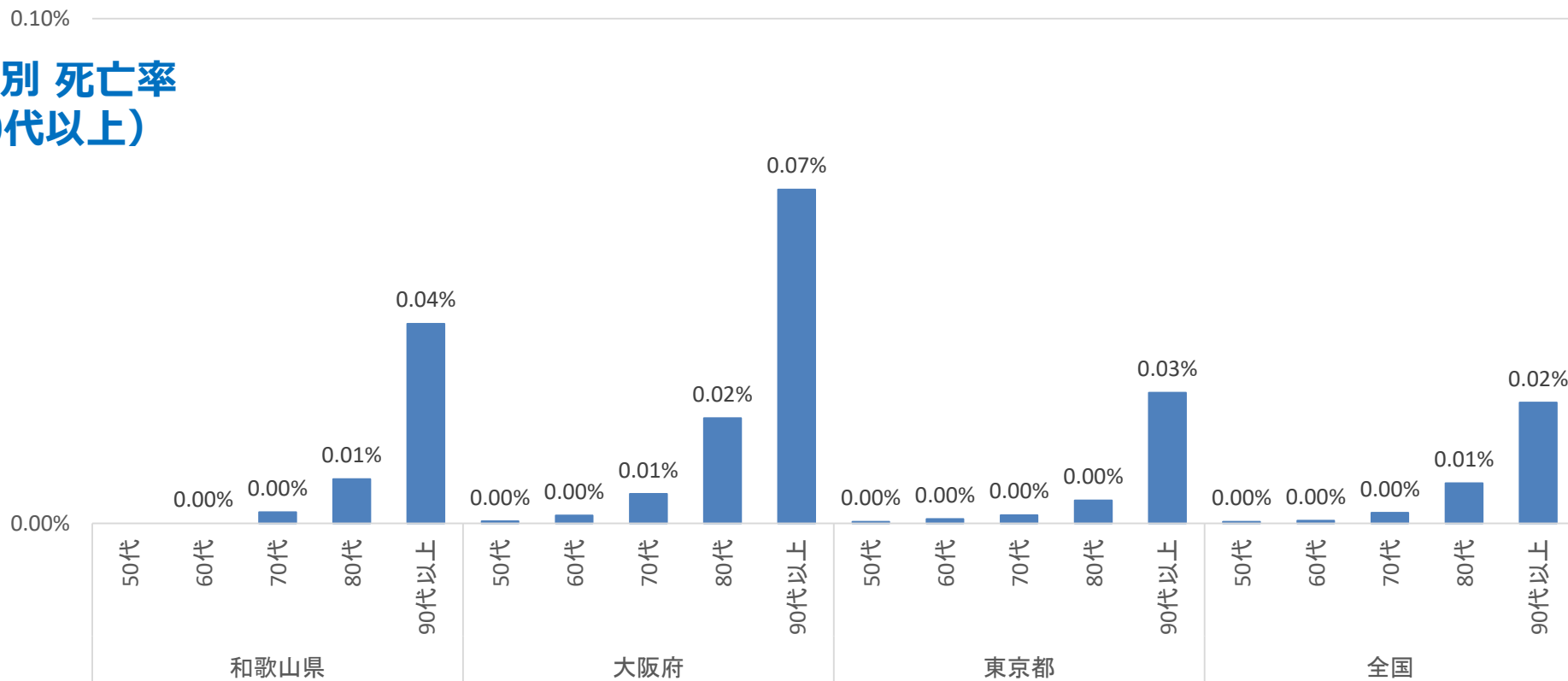
- これまでの死亡者89名のうちの死亡された場所は、病院が最も多く、次いで施設、自宅がわずかにあった。
- 第六波では、高齢者施設で多くのクラスターが同時期に発生したことも影響して、施設内での死亡者が7例あった。また、自宅で高齢者が家族に見守られながら亡くなられた方もいた。
- ワクチン接種について、高齢者の接種が進んだ第五波と第六波を比較すると、第六波の方がワクチン接種者が多かった。



第六波における新型コロナ 死亡率の比較

- 第六波では、高齢者施設でもクラスターが多発し、規模も大きかったことから、高齢者の感染者が急増した。このことから、高齢者の死亡も多くなった。

年代別 死亡率 (50代以上)



年齢調整 死亡率

0.49

1.00

0.35

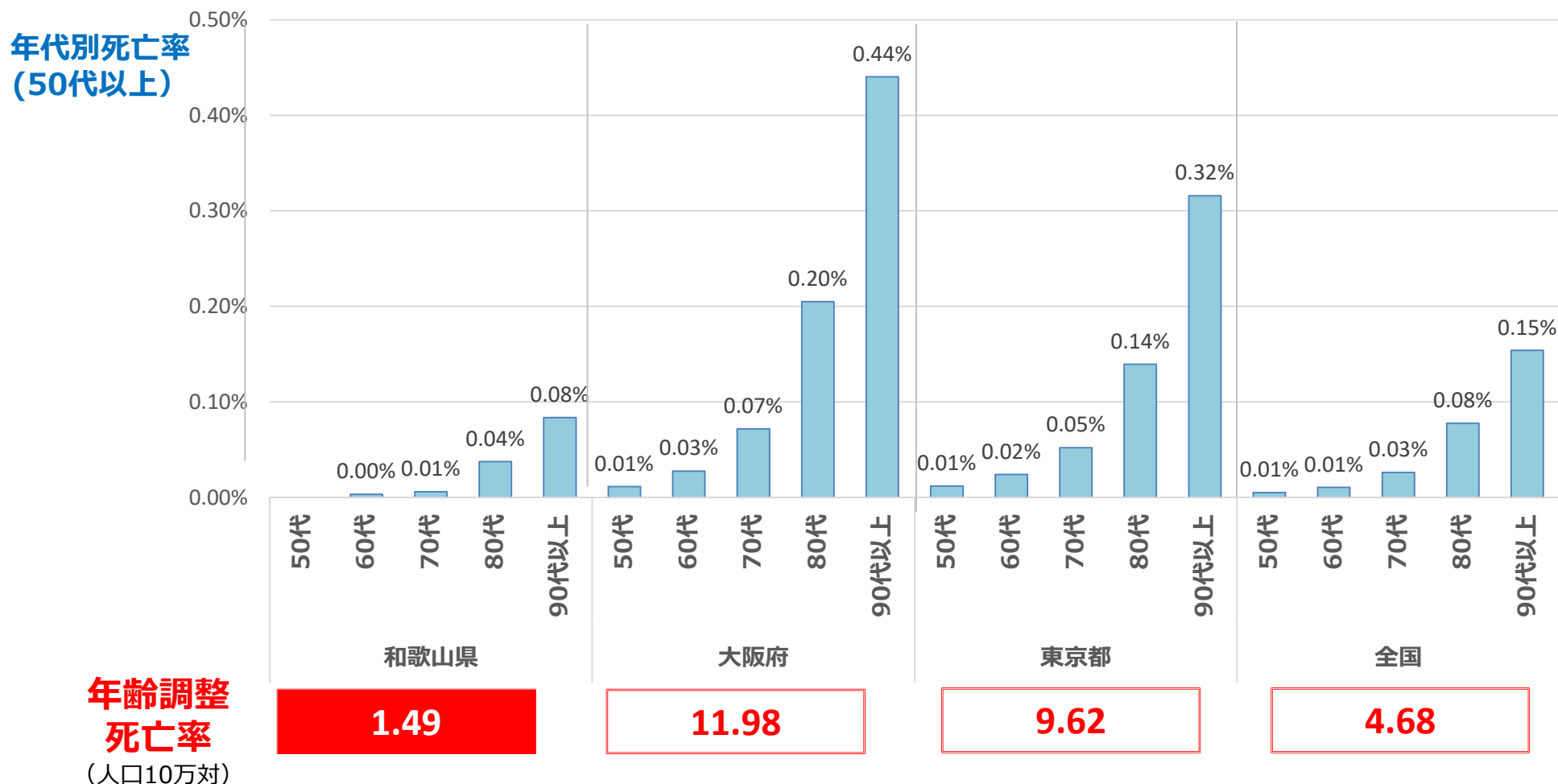
0.39

※1/5~2/15。人口はR2国勢調査。年齢調整は昭和60年モデル人口を使用

死亡者数は、厚生労働省「データからわかる - 新型コロナウイルス感染症情報 -」から。年齢不詳データを除く

これまでの新型コロナ 死亡率の比較

■ 全員入院により、感染拡大防止と重症化防止を図った結果、**年齢調整死亡率（50代以上）は、都市部や全国と比較しても低位**



※死亡者数は12/14累計

※人口はR2国勢調査。年齢調整は昭和60年モデル人口を使用

死亡者数は、厚生労働省「データからわかる－新型コロナウイルス感染症情報－」から。年齢不詳データを除く

死亡（間接死因含む）の状況

- 季節性インフルエンザによる致死率は0.02～0.03と推定されており、新型コロナウイルス感染症による死亡は、季節性インフルエンザによる死亡よりはかなり多いと考えられる。
- これは、新型コロナワクチン接種後の抗体値の低下による感染と治療が限定的であり、一般的に普及していないことが考えられる。
- 本県の新型コロナウイルス感染症による致死率が第六波では全国より高いが、これは、本県の80代以上の感染者の割合が、国公表（令和4年2月20日現在）では全国が約2.4%に対して、本県が約3.8%と高いことが原因と思われる。

【季節性インフルエンザの死亡数】

	全国	和歌山県
2017年	2,569	13
2018年	3,325	29
2019年	3,575	41
2020年	956	10

【新型コロナウイルスの死亡数】

	全国			和歌山県		
	致死率	死亡数	感染者数	致死率	死亡数	感染者数
2020年	1.48%	3,459	234,109	1.13%	7	619
2021年	1.00%	14,926	1,492,919	1.15%	55	4,787
2022年	0.13%	3,428	2,738,709	0.20%	30	14,713

※2022年2月19日現在

※チャーター便を除く国内事例

ワクチン接種

高齢者の定期接種率：約50%

高齢者の2回ワクチン接種率：90%以上

経口抗ウイルス薬

数種類普及

限定的

高齢者施設における ワクチン接種後の抗体保有追跡調査結果

1. 目的

高齢者施設関係者の新型コロナワクチン接種後の抗体獲得状況を前回、2回ワクチン接種後1か月から2か月後に行った。今回、同じ集団について2回ワクチン接種後6か月後の抗体値を把握し、クラスターの発生予測やワクチン追加接種の必要性など今後の感染対策に活用する。

2. 対象

介護福祉施設入居者・職員でワクチン接種を2回完了し、接種後6か月後の者

3. 検査・調査実施時期

令和4年1月

4. 検査・調査項目

検査項目：新型コロナウイルスN抗体及びS抗体

調査項目：年齢、性別、基礎疾患、ワクチン接種日

5. 調査者数

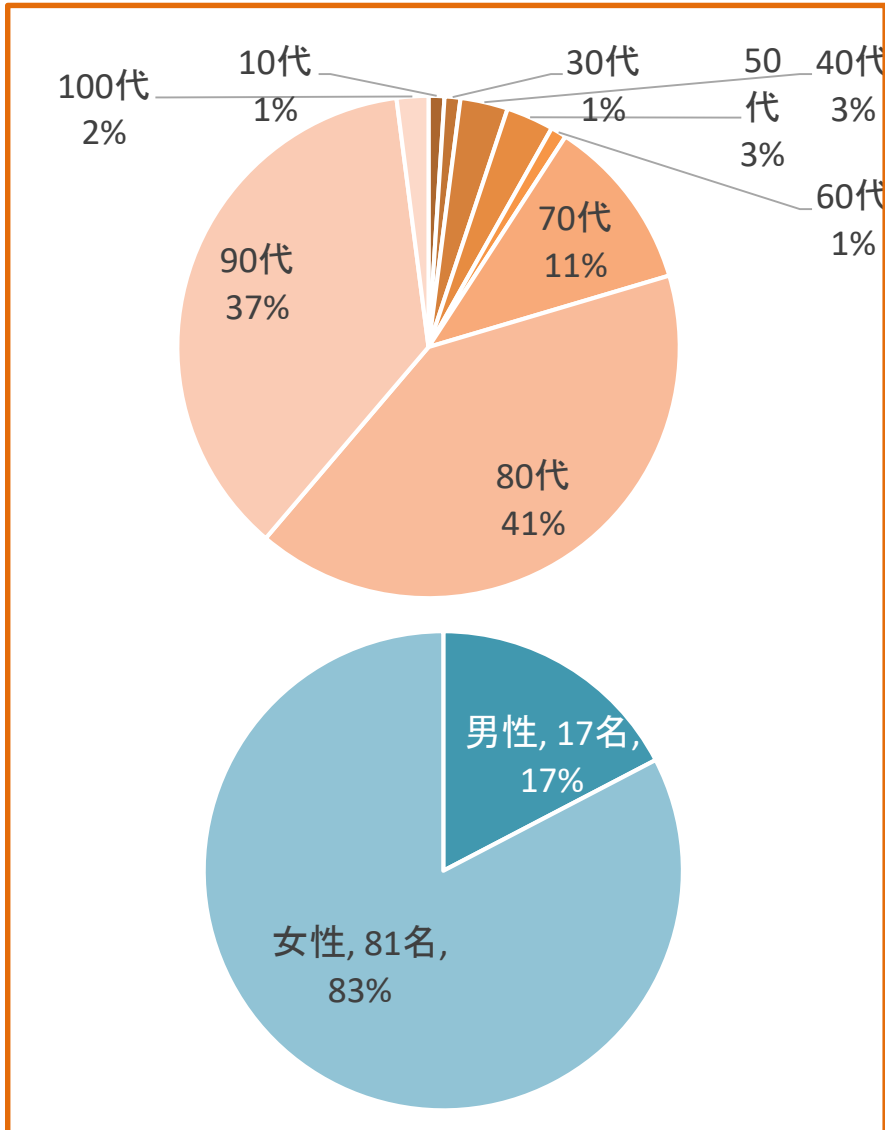
計98名（入居者89名 職員9名）

6. 検査協力医療機関

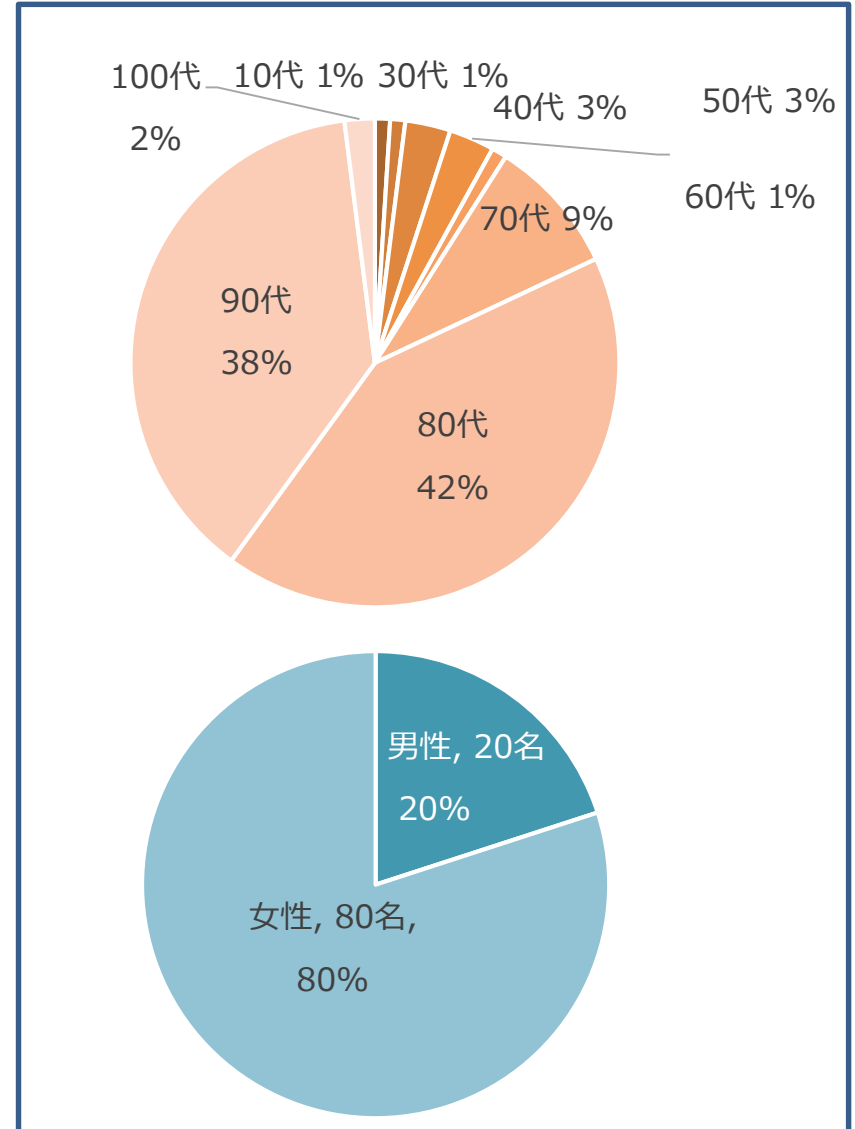
県内公立病院

ワクチン2回接種者の年代・性別

今回(98名)

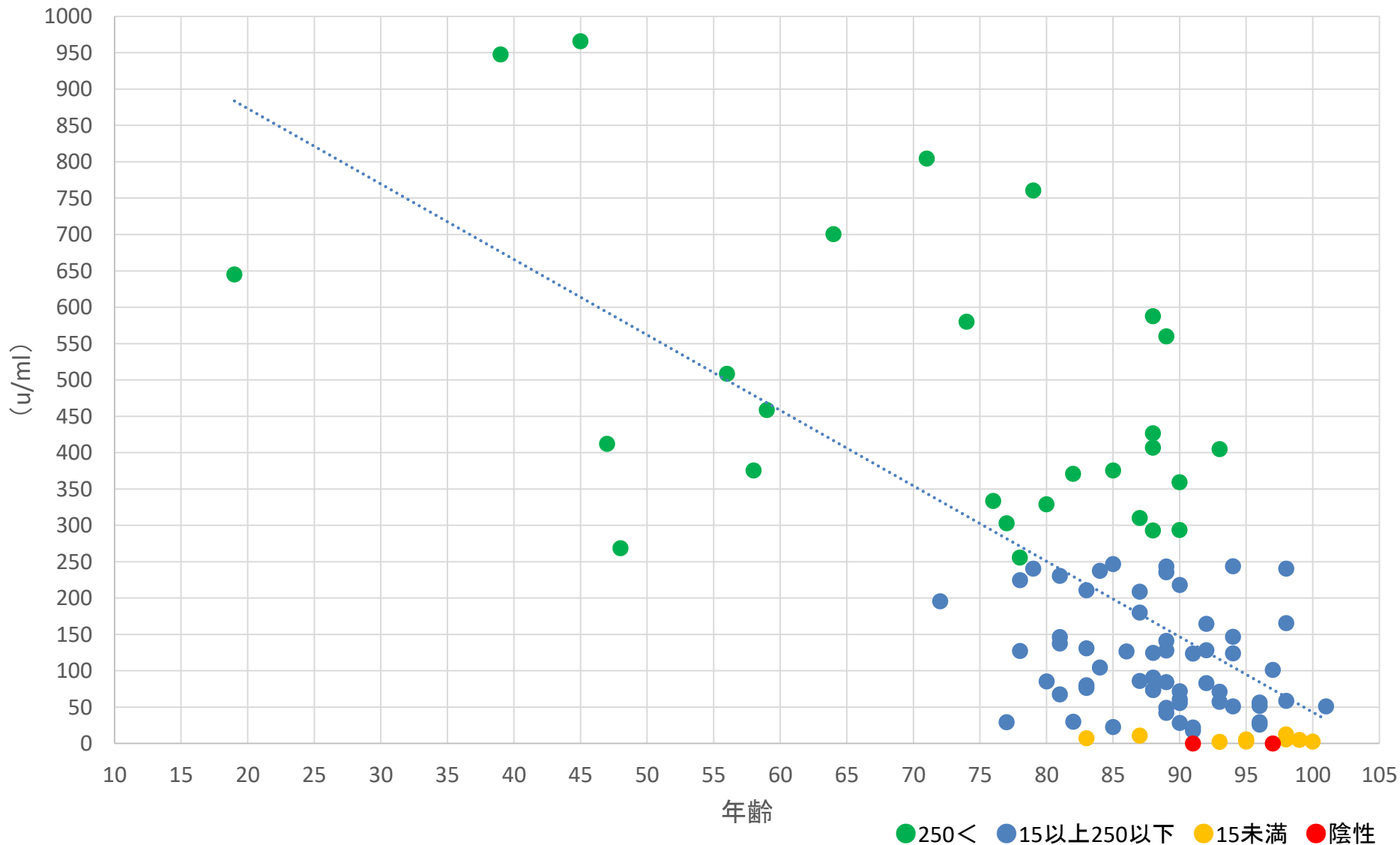


前回(100名)

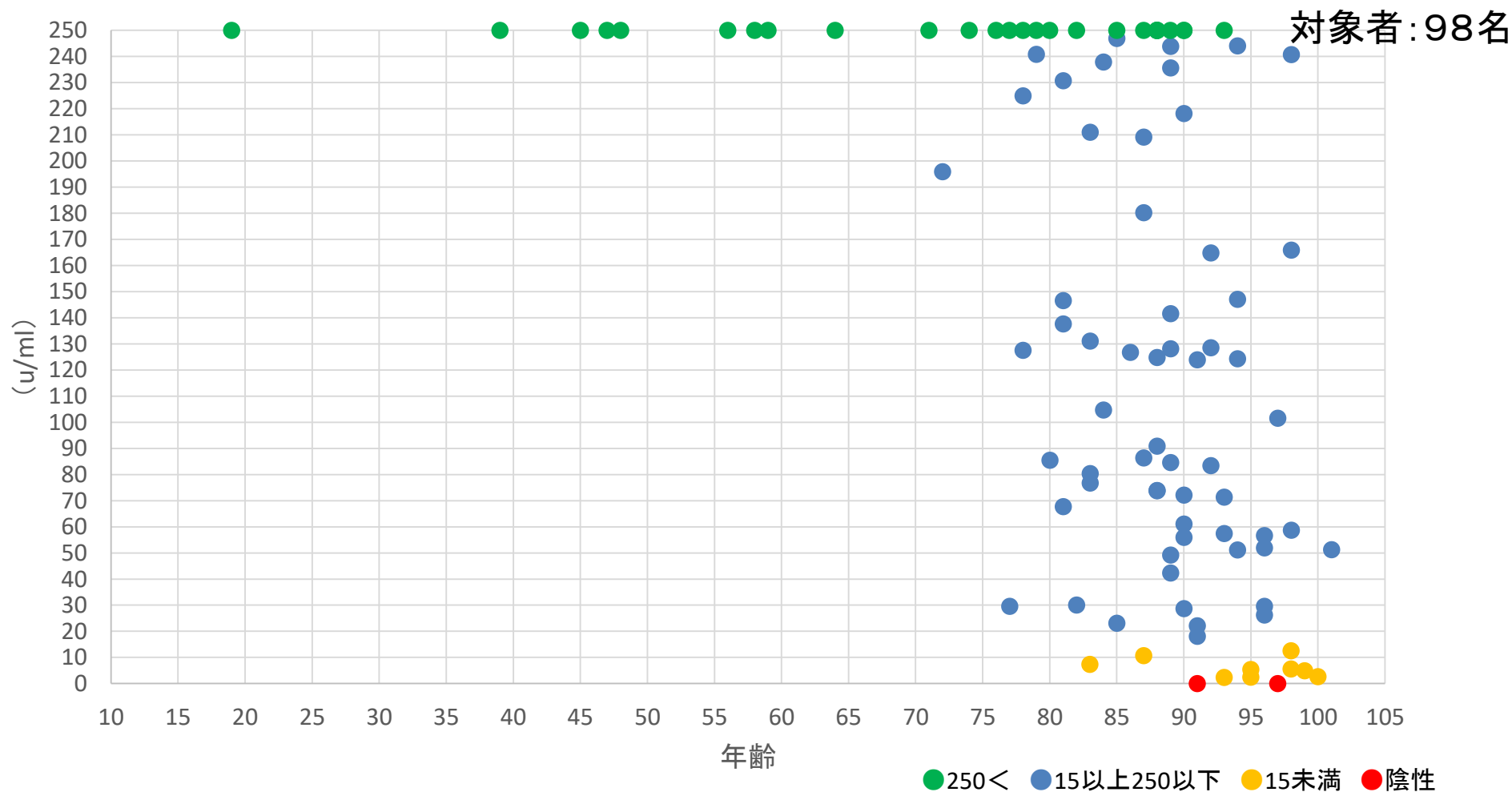


ワクチン2回接種6か月後の年齢とS抗体値の分布(全体)

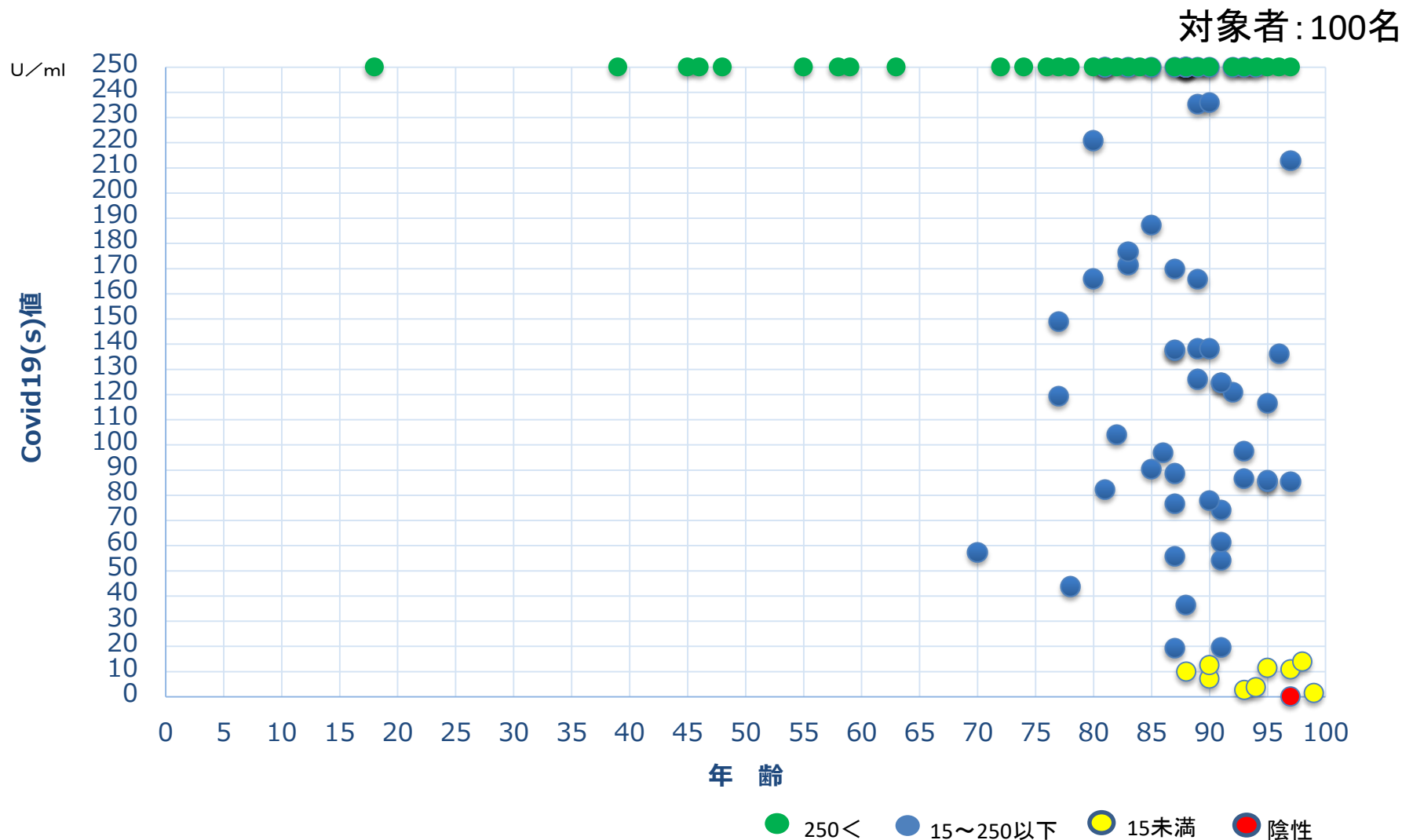
- ワクチン接種6か月後のS抗体値は、年齢が高くなると低値となり、特に高齢者で低値となっている。
- なお、N抗体陽性者はいなかった。



- ワクチン接種6か月後のS抗体値は陰性が2名(2%)あり、ワクチン接種後1か月時より1名増加した。
- S抗体値は陽性であるものの、S抗体値が15より低い者は11名(11%)あり、ワクチン接種後1か月時の10名(10%)より1ポイント増加した。また、S抗体値が250より大きい高力価の者は27名(28%)となり、ワクチン接種後1か月時の45名(45%)より27ポイント減少した。
- S抗体値は、6か月以上経過すると減少している者が特に、高齢者で多い。



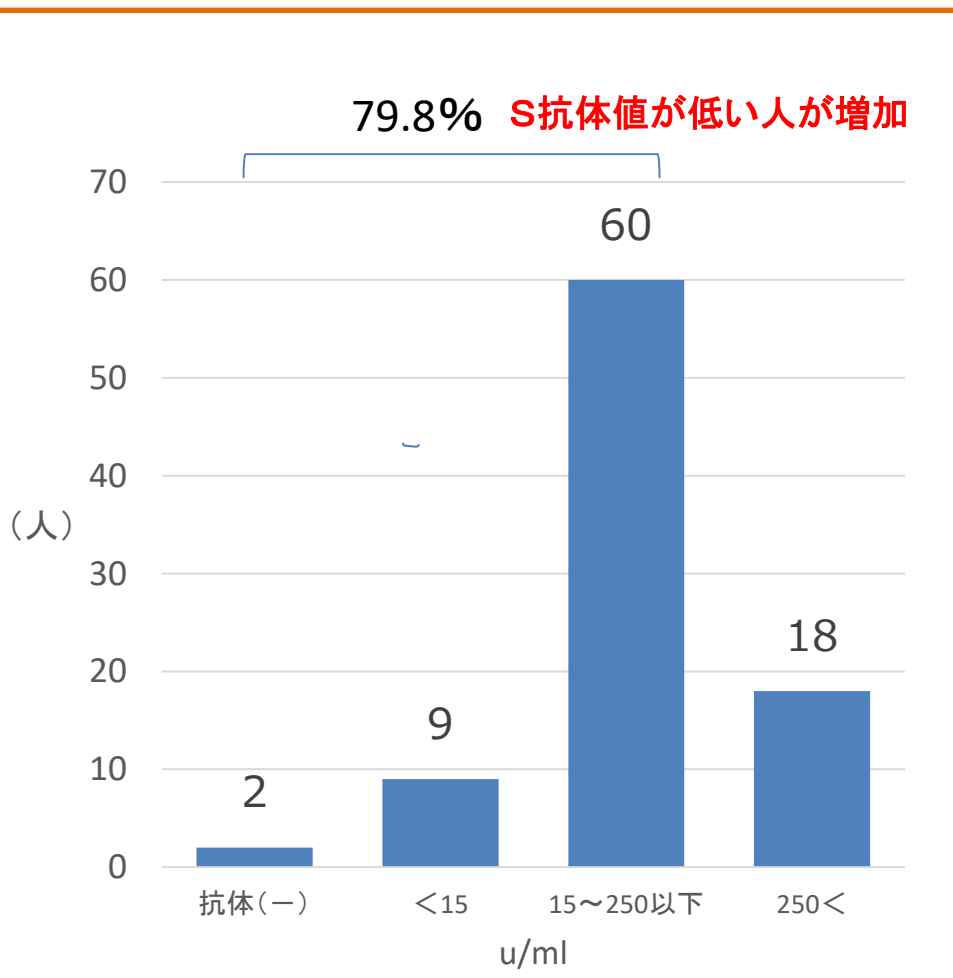
- ワクチン接種後に産生されたS抗体値は1名(1%)が陰性であった。
- S抗体値は陽性であるものの、既感染者で中和抗体が獲得されると推定されるS抗体値が15より低い者は9名(9%)あった。S抗体値が250より大きい高力価の者は45名(45%)いた。
- 抗体値が陰性または低い者は、85歳以上の高齢者に多かった。



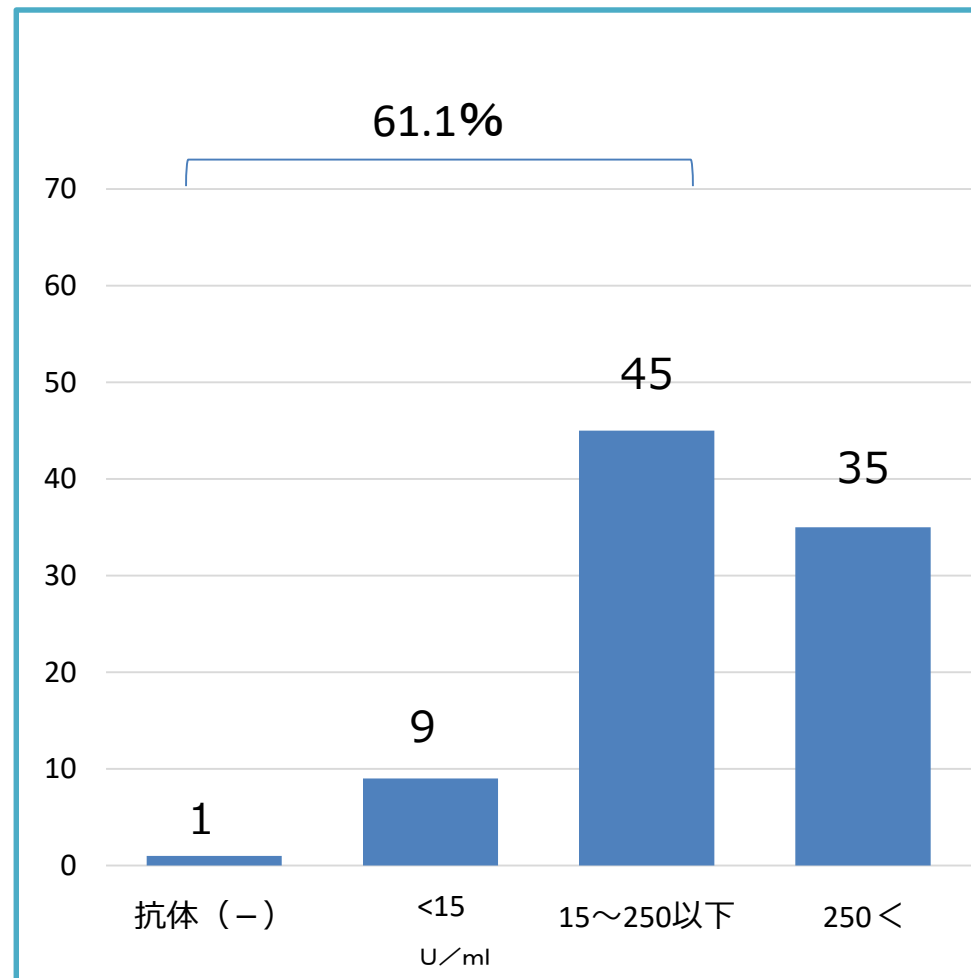
高齢施設入所者におけるワクチン2回接種のS抗体値

- 高齢者施設に入所している高齢者におけるワクチン接種6か月後のS抗体値は、接種後1か月後と比較すると250u/ml未満の者が18.9ポイント増加した。
- 陰性者も増加しており、ワクチン2回接種後6か月经過すれば、S抗体値は低下する者が多い。

2回ワクチン接種6か月後(入所者89名)



2回ワクチン接種1か月後(入所者90名)

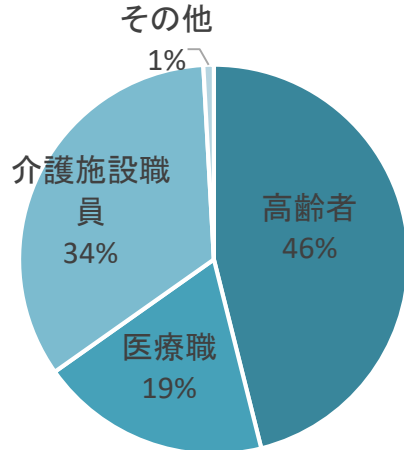


ワクチン3回接種者の感染

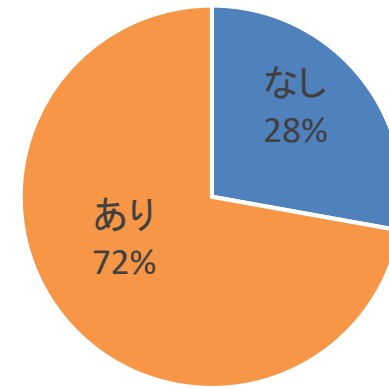
第六波におけるワクチン3回接種陽性者について

- 第六波のクラスター（92～215例目）における陽性者のうちワクチン3回接種陽性者は、クラスターの陽性者1977人のうち115人（約6%）であった。
- ワクチン3回接種陽性者の陽性判明時症状は、発熱等の症状がある者が約72%であり、約28%は症状が無かった。
- 現時点では、ワクチン3回接種陽性者では、抗体値も上昇しており、国基準に相当する重症者は1名のみである。

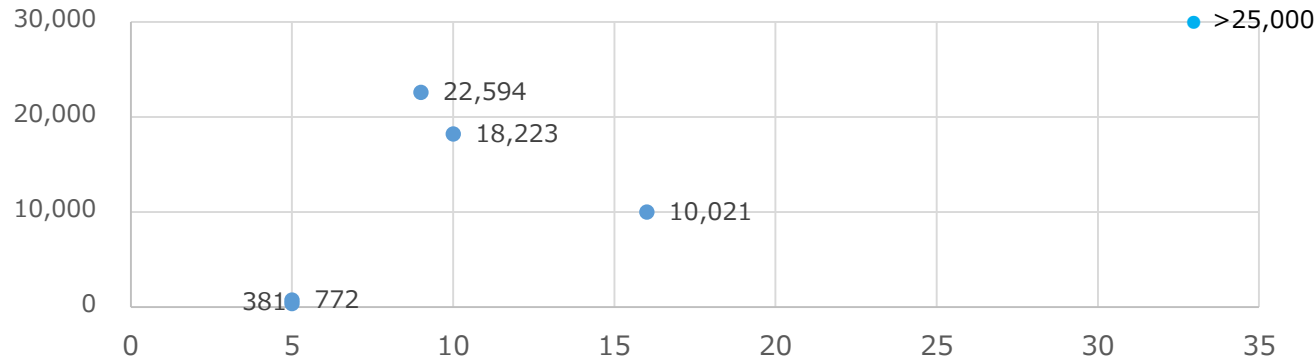
ワクチン3回接種者の職種



陽性判明時の症状の有無 (n=115)



S抗体価



3回目接種からの経過日数

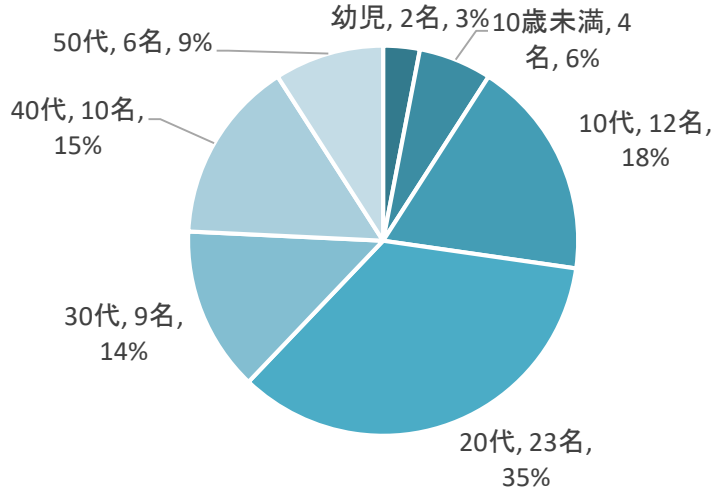
再感染事例

第六波における再感染とみられる陽性者について

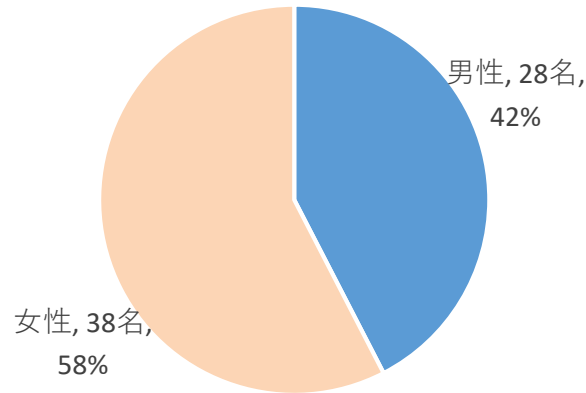
N=66名

- 再感染例は50代以下の者であった。特に、若い人では感染リスクのある行動を行うことにより再感染し、家族に感染させていることが推定される。
- オミクロン株は再感染例が多かったが、ワクチン接種未接種者に多い。また、初回感染は第二波から第五波までであった。若い人に多いことから基礎疾患をもっていないことが多い。

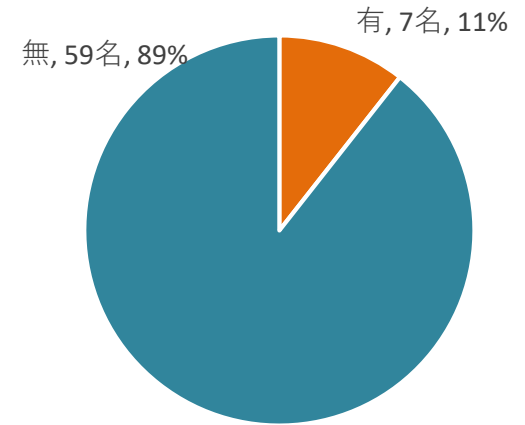
1. 年代



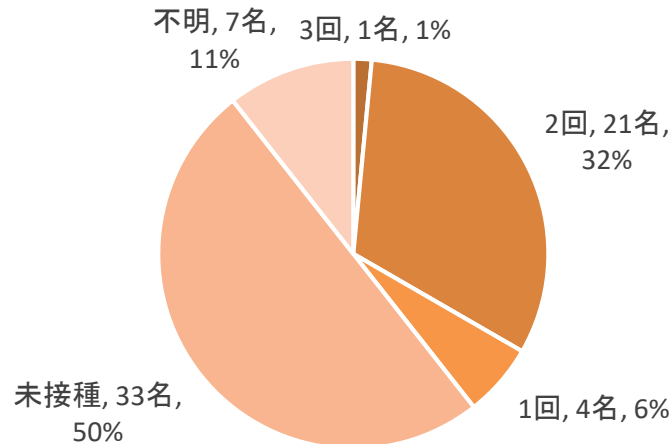
2. 性別



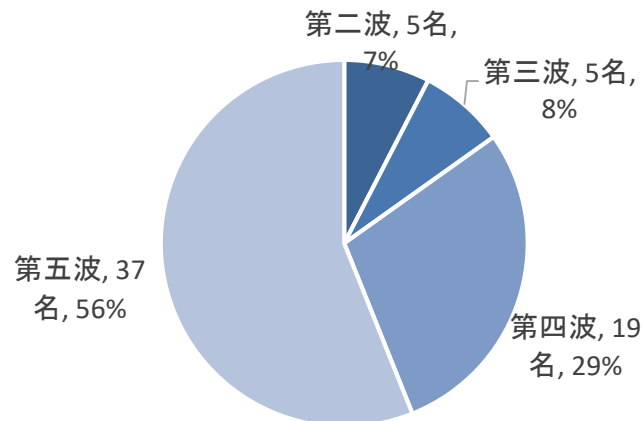
3. 基礎疾患の有無



4. ワクチン接種回数

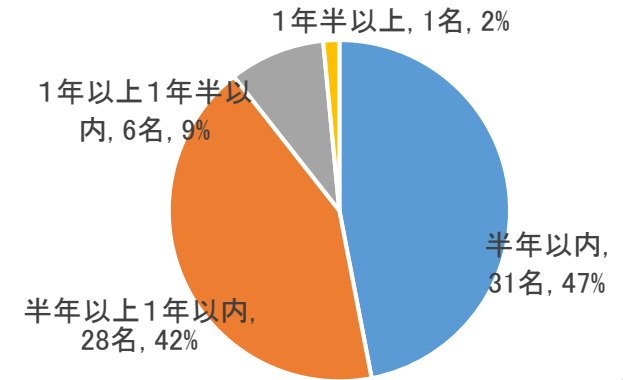


5. 初回感染の時期（波）



6. 再感染までの期間

(陽性確認検体の採取日の間隔による)



注意すべき事例

【事例】年代： 90歳代・男性

同居家族：なし

基礎疾患等	整形外科的疾患。喫煙歴あり	ワクチン 2回接種
診断までの経過	<p>令和4年1月、後に陽性となる友人と接触。 <u>接触後3日後に念のため保健所が接触者として検査するもPCR陰性。</u> <u>接触後5日後に発熱で発症し、医療機関受診するもPCR検査未実施。</u> <u>発症後5日後に微熱、全身倦怠感持続し、症状が改善しないため、</u> <u>再度、同じ医療機関受診。肺炎あり、低酸素血症を認めたため、</u> <u>コロナ受け入れ医療機関に救急搬送され、PCR陽性。</u></p>	
診断までの受診回数	3回	
診断時の状況	SpO2 86%、全身倦怠感	
入院時の状況	入院医療機関に救急搬送	
入院後の状況	高流量酸素投与、薬物治療	
他者への感染	無し	
転帰	入院19日後に死亡	

【事例】年代： 70歳代・女性

同居家族： あり

基礎疾患等	糖尿病、高血圧、BMI 38	ワクチン 未接種
診断までの経過	<p>令和4年2月、同居家族が陽性。本人は無症状。 <u>家族陽性判明後3日後の朝（当日は接触者検診の予定であった）</u> <u>目覚めたが起き上がれず、家族が話かけてもはっきりと答えられず。</u> 体温：37.5度、SpO2 55% 家族が救急要請し、医療機関に救急搬送され、PCR陽性。</p>	
診断までの受診回数	1回	
診断時の状況	低酸素血症、意識低下	
入院時の状況	入院医療機関に救急搬送	
入院後の状況	ICU収容、人工呼吸器装着、酸素投与、薬物治療	
他者への感染	無し	
転帰	ECMO導入	

症状あれば早期受診を！デルタ株による悪化事例

第六波

【事例】年代： 60歳代・男性

同居家族： あり

基礎疾患等	なし	ワクチン 未接種
診断までの経過	令和4年1月、咳が出現するも医療機関受診なし。7日間持続し、我慢できなくなり、医療機関受診。 CTにて、重症の肺炎を認め、診察医が入院医療機関を紹介。救急受診し、PCR陽性。	
診断までの受診回数	2回	
診断時の状況	発熱、低酸素血症	
入院時の状況	入院医療機関に救急入院	
入院後の状況	酸素投与、薬物治療	
他者への感染	無し	
転帰	発症後9日後に低酸素血症進行し、高流量酸素投与となる。 発症11日後にICU収容し、人工呼吸器6日間装着。その後も13日間高流量酸素投与。計30日以上酸素投与が必要となる。	

【事例】 年代： 10歳未満・男性

同居家族： あり

基礎疾患等	なし	ワクチン 未接種
診断までの経過	クラスターとなった保育園に兄弟一緒に通園していた。兄弟が先に陽性となり、咳で発症。発症翌日に医療機関受診し陽性判明。	
診断までの受診回数	1回	
診断時の状況	発熱（38度台）、咳	
入院時の状況	発熱、咳、鼻汁	
入院後の状況	発症後2日後に入院。その後も発熱持続（計6日間）し、入院5日目で肺炎と診断され、ステロイド治療を受ける。	
転帰	軽快退院	

【事例】年代： 60歳代・女性

同居家族： あり

基礎疾患等	悪性新生物でステロイド使用	ワクチン 未接種
診断までの経過	令和4年1月、同居家族が陽性となり、濃厚接触者として検査。陽性判明時無症状。翌日、入院となる。	
診断までの受診回数	0回	
診断時の状況	無症状	
入院時の状況	無症状	
入院後の状況	入院翌日に咳、鼻汁出現。陽性確認後10日で退院。	
他者への感染	家族1名	
転帰	発症後14日後（退院後7日後）に、発熱（39.2度）、食欲低下、全身倦怠感、SpO2 93%となり、肺炎像認め、薬物療法開始。 再入院時PCR検査のCt値=約20 血液検査：N抗体 陰性、S抗体 陰性	

まとめ

- 第六波はオミクロン株の流行により、本県もこれまでにない感染の爆発が起こった。
- 感染は特に、小児と高齢者に多く見られたが、これは、高齢者施設と保育施設や学校でのクラスター発生が原因と考えられる。
- 幸い、小児や若い年代では発熱などの症状が初期には強く出現するが、経過が良好であることが多かった。しかし、高齢者では、基礎疾患をほとんどの方が持っていることなどから重症化し、死亡される事例が目立った。
- 重症者や死亡者では、基礎疾患を持っている人が多い。また、受診、診断の遅れがある事例があり、早期診断早期治療の重要性を改めて認識した。
- 高齢者施設でのワクチン2回接種後の抗体値の追跡調査の結果から、高齢者ではワクチン2回接種6か月以上経過すると抗体値が低下する事例が多いことが分かった。
- これらのことから、高齢者や基礎疾患を持っている人はワクチン3回目接種によりブースター効果による重症化予防が期待されることから、接種が推奨される。
- ただし、ワクチンを3回接種しても感染者がいることから、今後も引き続きマスクの着用や手洗い、換気などの基本的な感染予防対策の実施が重要である。
- 今後も、施設での感染拡大防止を図るため、保健所の疫学調査や感染管理認定看護師などの施設への派遣を行うとともに、早期に抗ウイルス剤や抗体薬の投与を進め、早期治療を行い重症化を防止していく必要がある。
- 今後とも関係機関や県民の皆様のご理解、ご協力をお願い致します。